

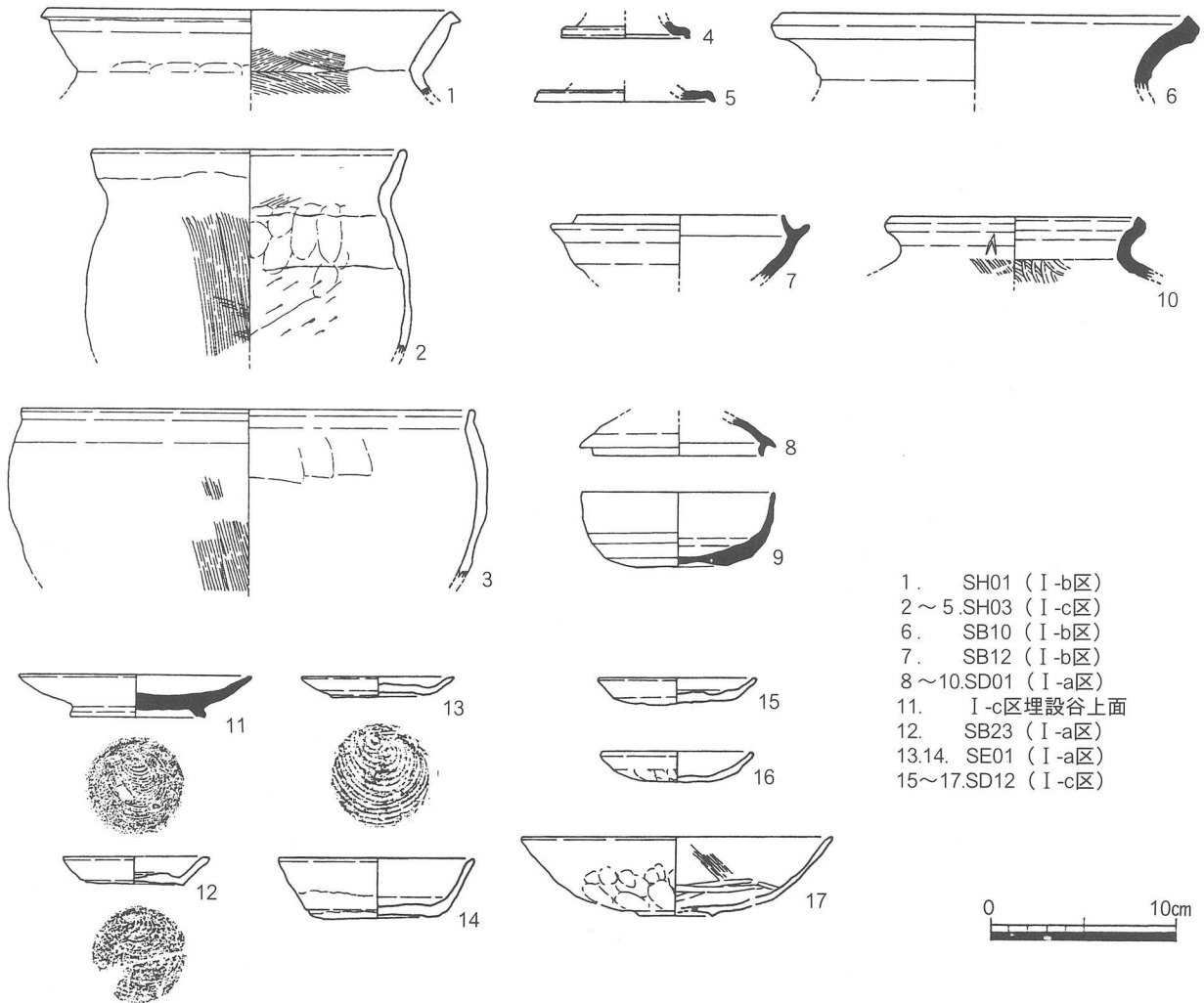


写真51 S D 08南北溝全景 (南より)



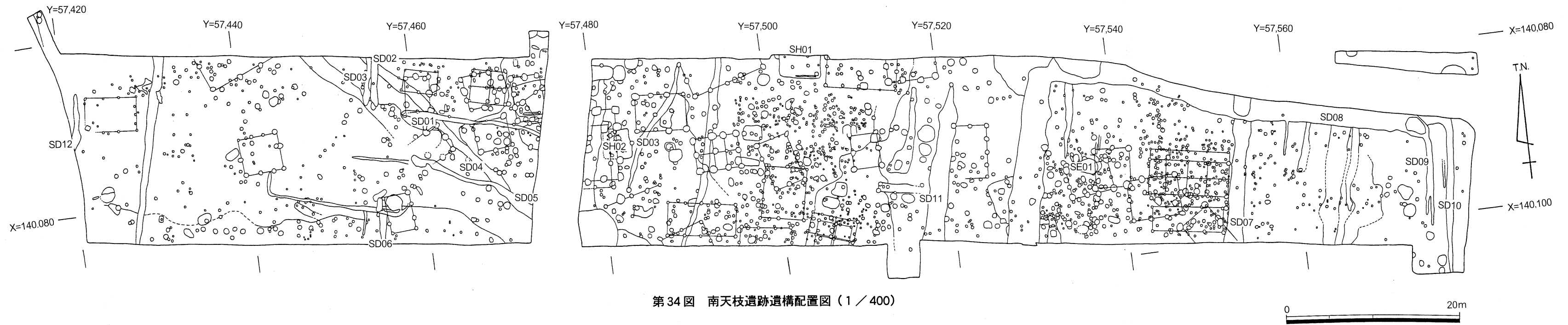
写真52 S D 08土層断面 (北より)

を測る。主軸方位はN11° Eを向く。断面は浅い皿状を呈し、埋土は灰色の砂質土である。出土遺物としては土師器羽釜、陶磁器片等が出土した。詳細な時期については課題を残すが、概ね近世前半頃と考えられる。

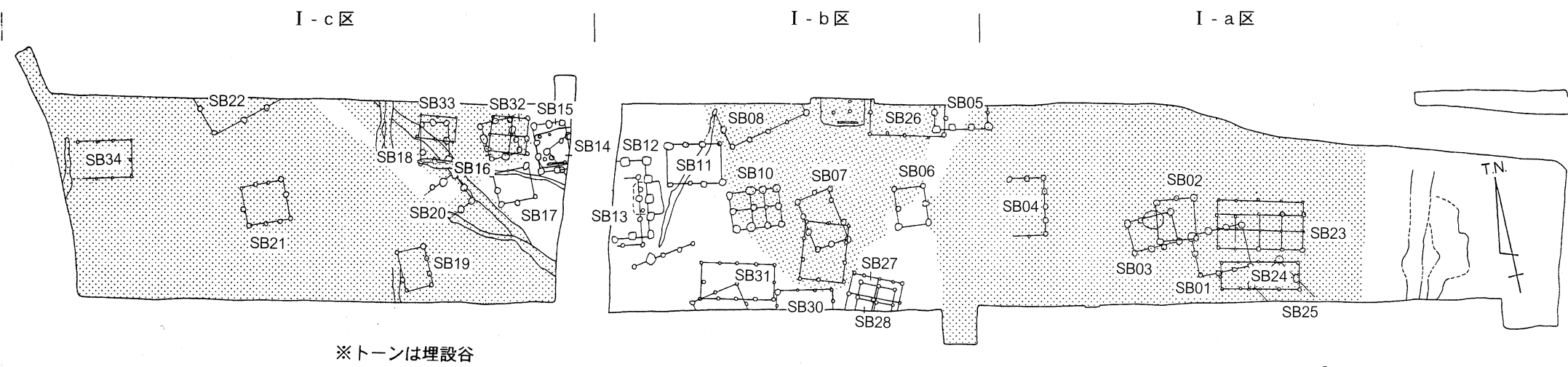


- 1. SH01 (I-b区)
- 2~5. SH03 (I-c区)
- 6. SB10 (I-b区)
- 7. SB12 (I-b区)
- 8~10. SD01 (I-a区)
- 11. I-c区埋設谷上面
- 12. SB23 (I-a区)
- 13, 14. SE01 (I-a区)
- 15~17. SD12 (I-c区)

第33図 南天枝遺跡出土土器実測図 (1 / 4)

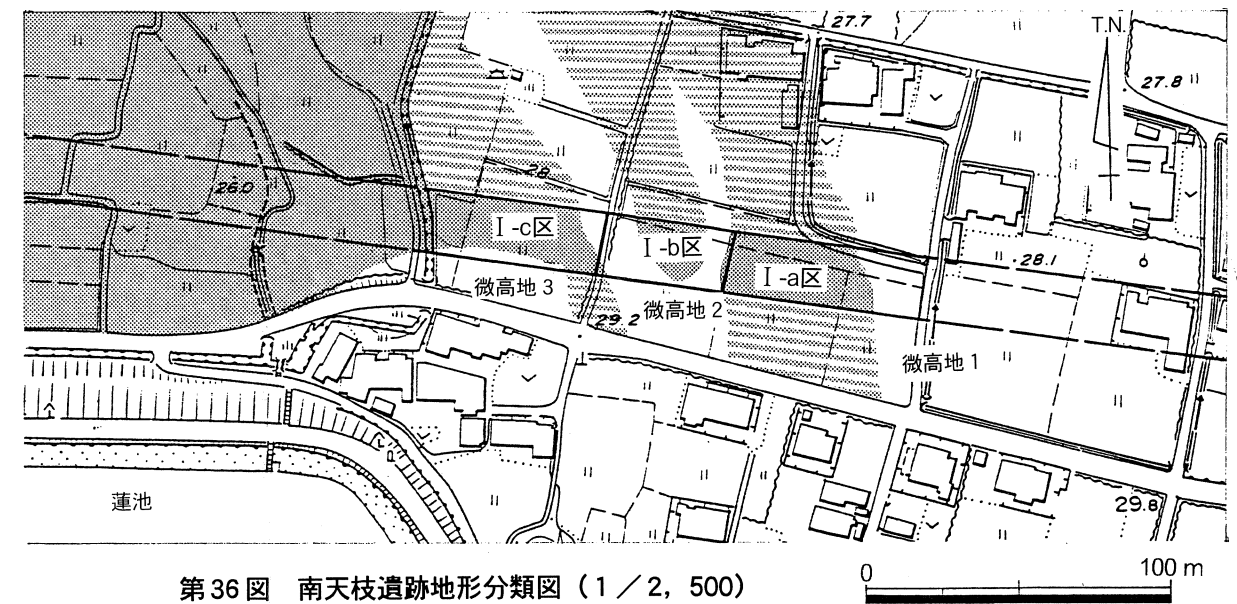


第34図 南天枝遺跡遺構配置図 (1 / 400)



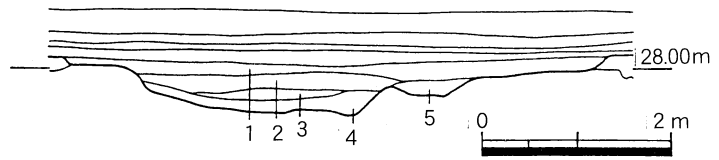
※トーンは埋設谷

第35図 南天枝遺跡掘立柱建物配置略図 (1 / 600)



第36図 南天枝遺跡地形分類図 (1 / 2, 500)

SD08~10 I a区埋設谷上面で検出した区画溝群である。SD08は大型の溝で、現在の里道の方向に合致した東西溝と、それに直交する南北溝に分けられ、二つの溝はI a区北西部で交わる。なお、SD09・10は東端部でSD08より南に分岐する小規模な枝溝である。SD08の東西溝の検出長45m 幅2m以上深さ0.5mを測る。南北溝の検出長20.5m 幅



- 1 淡灰褐色砂質土
- 2 暗灰褐色砂質土 (黄色粘土ブロック混)
- 3 灰褐色砂質土
- 4 暗灰色砂質土
- 5 暗灰褐色砂質土

第37図 SD08断面図 (1/80)

4m 深さ0.5mを測る。主軸方位は南北溝で、N14° Eを向く。断面形は浅いU字状を呈し、埋土は灰色系の砂質土である。出土遺物としては土師器羽釜、須恵器・陶磁器片等が比較的少量に出土した。詳細な時期については課題を残すが、概ね近世前半頃と考えられる。

SD11 I a区埋設谷上面で検出した大型の南北溝である。SD08の南北溝より約11m西に離れ、SD08と同方向に配された溝である。その位置関係よりSD08と関連した区画溝の可能性が高い。検出長17.5m 幅2.5m 深さ0.3mを測る。主軸方位はN14° Eを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は乳灰色系の砂質土である。

調査区	遺構名	規模・構造 桁行×梁行 (m)	面積 (m ²)	主軸方位	備考	検出時遺構名
I-a区	SB01	3間 (5.6) × 2間 (4.5)	25.2	N-87° - E		SB12
I-a区	SB02	1間 (4.3) × 2間 (4)	17.2	N-0°		SB14
I-a区	SB03	3間 (4.9) × 1間 (3.3)	16.2	N-83° - E		SB13
I-a区	SB04	4間 (6.1) × 2間 (3.7) 以上	22.6 以上	N-5° - E		SB11
I-b区	SB05	3間 (5.4) × 1間 (2) 以上	10.8 以上	N-90° - EW		SB08
I-b区	SB06	2間 (4.1) × 1間 (3.3)	13.5	N-0°		SB19
I-b区	SB07	3間 (5.6) × 2間 (3.5)	19.6	N-15° - E		SB16
I-b区	SB08	4間 (8.6) × 2間 (4.2)	36.1 以上	N-71° - E		SB13
I-b区	SB09	2間 (5.1) × 1間 (2.5)	12.8 以上	N-73° - E		SB05
I-b区	SB10	3間 (5.1) × 2間 (4)	20.4	N-88° - E	総柱	SB14
I-b区	SB11	3間 (5.6) × 1間 (4.1)	23	N-85° - W		SB12
I-b区	SB12	4間 (8) × 2間 (4) 以上	32 以上	N-4° - E		SB02
I-b区	SB13	3間 (7.4) × 1間 (2.7) 以上	20 以上	N-4° - E		SB01
I-c区	SB14	1間 (2.5) 以上 × 1間 (1.9) 以上	4.8 以上	N-30° - W		SB08
I-c区	SB15	3間 (5.1) × 2間 (3.1)	15.8	N-3° - W		SB07
I-c区	SB16	3間 (3.8) × 2間 (3.4)	12.9	N-80° - E		SB09
I-c区	SB17	2間 (4) × 2間 (3.3)	13.2	N-9° - W		SB10
I-c区	SB18	2間 (4.2) × 2間 (2.9)	12.2	N-3° - E		SB11
I-c区	SB19	3間 (4.3) × 1間 (2.9)	12.5	N-6° - W		SB06
I-c区	SB20	2間 (3.3) × 2間 (3) 以上	9.9 以上	N-26° - W		SB13
I-c区	SB21	2間 (4.5) × 2間 (4.3)	19.4	N-7° - W		SB04
I-c区	SB22	2間 (6.3) × 1間 (3) 以上	18.9 以上	N-68° - E		SB12
I-a区	SB23	4間 (9.3) × 2間 (4)	37.2	N-80° - W	北面底	SB16
I-a区	SB24	4間 (8.3) × 2間 (2.9)	24.1	N-81° - W		SB06
I-a区	SB25	1間 (2.6) 以上 × 1間 (3.4) 以上	8.8 以上	N-34° - W		SB03
I-b区	SB26	4間 (8) × 1間 (2.3) 以上	18.4	N-78° - W		SB18
I-b区	SB27	1間 (2.5) 以上 × 4間 (5.3)	13.3 以上	N-20.5° - E	総柱	SB09
I-b区	SB28	1間 (1.6) 以上 × 2間 (3.8)	6.1 以上	N-20° - E		SB07
I-b区	SB29	3間 (6.1) × 2間 (4.8)	29.3	N-12.5° - E		SB06
I-b区	SB30	3間 (5.6) × 1間 (1.8) 以上	10.1 以上	N-81° - W		SB11
I-b区	SB31	4間 (7.8) × 2間 (3.8)	29.6	N-80° - W		SB04
I-c区	SB32	2間 (4) × 2間 (4)	16	N-11° - E	総柱	SB01
I-c区	SB33	2間 (4) × 1間 (2.6)	10.4	N-12° - E		SB03
I-c区	SB34	3間 (6) × 2間 (4)	24	N-79° - W		SB05

表1 掘立柱建物一覧表

Ⅶ. 尾端遺跡

1. 位置と環境

尾端遺跡は、高松市と三木町の境界より東へ延長300m、町道田中氷上線に隣接した木田郡三木町田中に所在する。

地形的には蓮池の西岸を形成する低丘陵に位置し、その丘陵の西斜面に遺跡は展開する。遺跡が斜面部に展開する関係上、丘陵頂部と裾部との標高の差は著しく、頂部で27.0m～裾部で22.0m前後を測る。



第38図 尾端遺跡位置図(1/50,000)

2. 調査成果の概要

調査対象地は町道氷上田中線に平行する形で、東西延長190m 面積4,200㎡を測る。調査区の設定は東よりⅡa～Ⅱd区に4分割して調査を実施した。調査地の地目は全て水田である。

地形的には本遺跡は、低丘陵の斜面地形と丘陵裾部の低地部よりなる。調査区を地形で区分すれば、斜面部はⅡa・b区、低地部はⅡc・d区にあたる。斜面部からは古墳時代末～奈良時代、近世後半の集落及び墓群、低地部東半部では斜面部より続く古墳時代末～奈良時代の集落、西半部では古墳時代末～奈良時代の溝群等を検出した。

今回の調査では弥生時代中・後期、古墳時代末、奈良時代、中世、江戸時代の遺構・遺物を検出した。この中で弥生時代中・後期、中世の資料は、少量の遺物が出土したにすぎず、周辺に同時期の遺跡が展開する可能性を指摘するにとどまる。なお、遺物が出土していないため詳細な時期については不明だが、おそらく縄文時代の落とし穴状遺構と考えられる土坑を2基検出している。

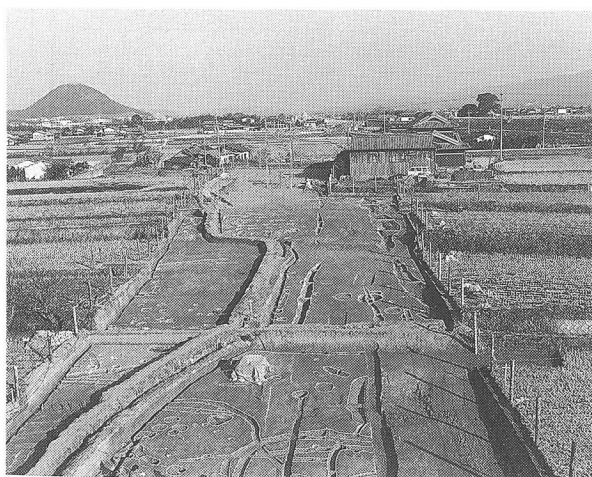


写真53 Ⅱb区全景(西より)

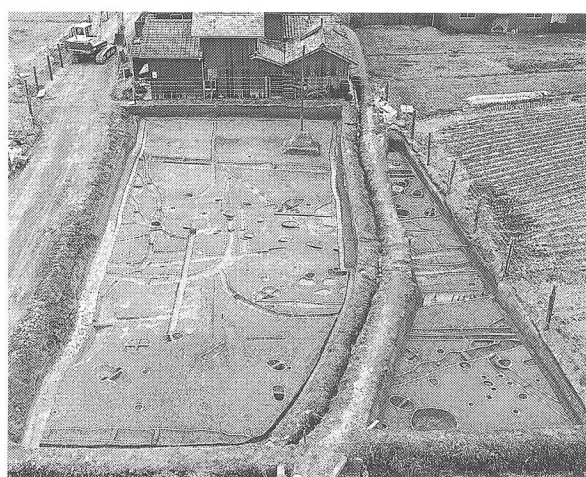


写真54 Ⅱc区全景(東より)

(1) 縄文時代～弥生時代

縄文時代の可能性が高い遺構としては、Ⅱa区東部で落とし穴状遺構と考えられる土坑2基を検出した。但し、出土遺物が一切ないので詳細な時期については問題を残す。また、先にも触れたが弥生時代の中・後期の資料は少量の遺物のみである。周辺に同時期の遺跡が展開する可能性を指摘できる。

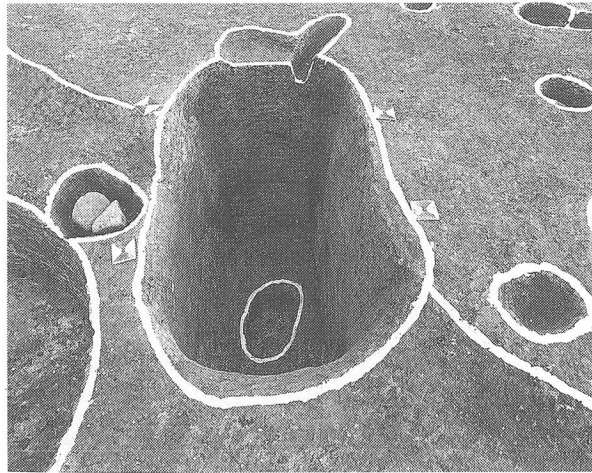


写真55 SK01全景（北より）

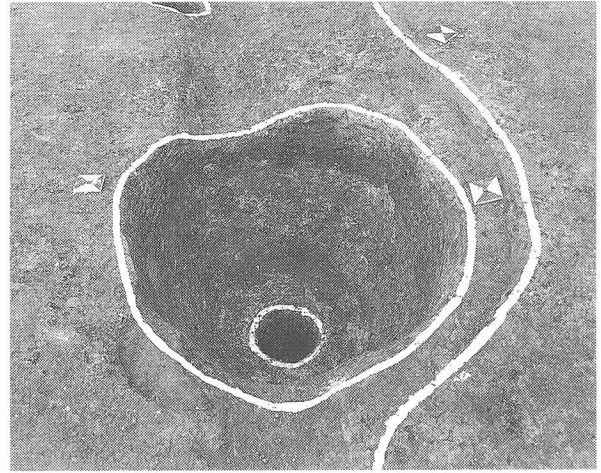
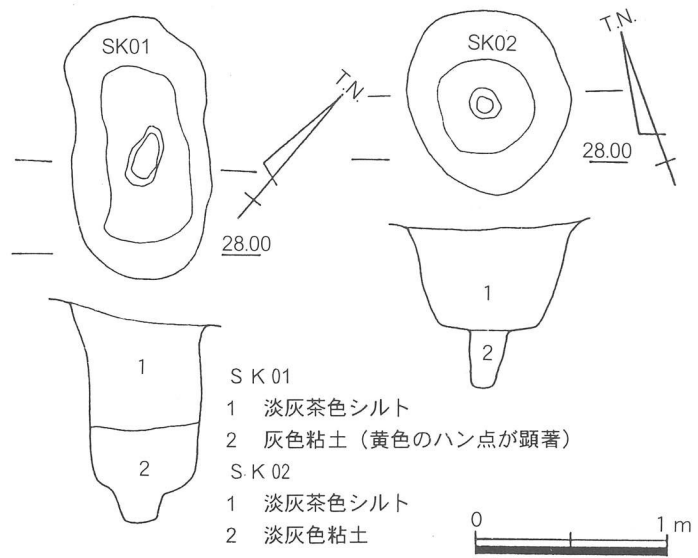


写真56 SK02全景（南より）

SK01 II a区東部で検出した落とし穴状の土坑である。平面形は楕円形、断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦で中央に深さ0.15mの楕円形状の凹部を持つ。長径1.4m 短径0.7m 深さ1.0mを測る。埋土は上・下2層に区分できる。上層は淡灰茶色シルト、下層は灰色粘土である。出土遺物は皆無である。

SK02 II a区東部で検出した落とし穴状の土坑である。平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦で中央に深さ0.3mの円形の凹部を持つ。長径1.0m 短径0.9m 深さ0.9mを測る。埋土は上・下2層に区分できる。上層は淡灰茶色シルト、下層は淡灰色粘土である。出土遺物はSK01同様皆無である。



第39図 SK01・02平・断面図 (1/40)

(2) 古墳時代末～奈良時代

当該期の遺構はII a区を除く対象地のほぼ全域より検出している。II b～II c区より掘立柱建物、溝状遺構、II d区より小規模な溝群等である。主要な遺構はSB01～08, 10・11, SK04, SD03～15等の諸遺構である。II c～II d区にかけての地域では ①古墳時代末, ②古墳時代末～奈良時代の遺物包含層を確認した。なお、II c区では包含層の下面で遺構面を、II d区ではこれらの包含層を挟んで古墳時代末(下層遺構面)、奈良時代(上層遺構面)の二つの遺構面を検出した。また、II d区上層遺構面のSD12からは小規模な木樋を検出している。以上の遺構の分布状態より対象地を大きく分ければ、II a～II c区までが集落域、II d区以西が生産域と捉えられるようである。

遺構の検出状況より当該期の集落範囲を推定すれば、東限はII b区東端、西限はSD09、南限はSD03周辺が考えられる。これらの状況より集落の中心は対象地より北側に展開するようである。なお、SD03周辺からは当該期の遺構は皆無である。そのためSD03が集落の南限を画する溝状遺構である可能

性が高い。また、この溝は周辺域の条理地割に符合する。そのため今後の調査資料として注意を要する。掘立柱建物は合計で10棟検出したが、柱穴出土の遺物が乏しく、とりあえずこの時期に加えている建物も数棟含んでいる。検出した掘立柱建物群を主軸方位で分ければ ①SB01・10・11 ②SB02～05 ③SB06 ④SB07・08等に4区分できる。また、同一グループ内でも重複する事例もみられる点より、これらの建物群は5時期程度の時期差を含んでいるものと考えられる。

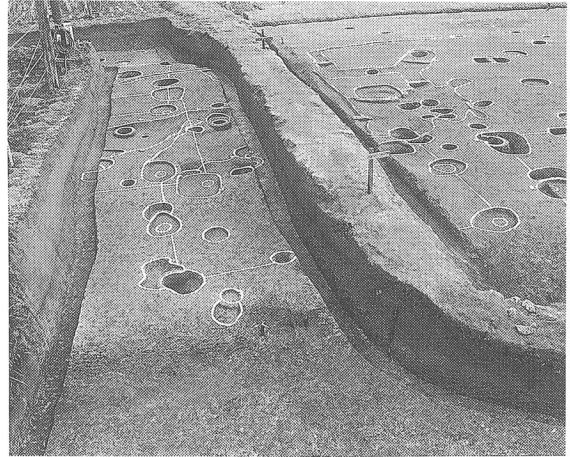


写真57 SB01～03全景（西より）

SB04 II b区東部中央でSB01～03と近接して検出した、南北棟の総柱の掘立柱建物である。斜面の傾斜変換点に位置する関係上、西側柱列は僅かに歪んでいる。桁行4間（5.3m）×梁間2間（3.5m）面積18.5㎡を測り、主軸は真北を向く。柱穴掘形平面は不整円形ないしは楕円形、断面は浅い不整U字状を呈し、径0.2～1.0m 深さ0.2～0.6mを測る。埋土は黄灰色系の粘土ブロックを含む灰色系の粘質土よりなる。出土遺物は須恵器と土師器の細片だけである。そのため詳細な時期については問題を残すが、周辺の建物群との関係で8世紀頃の可能性が高い。

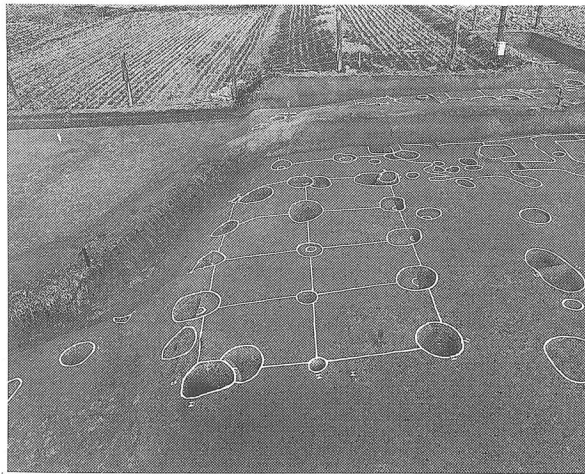
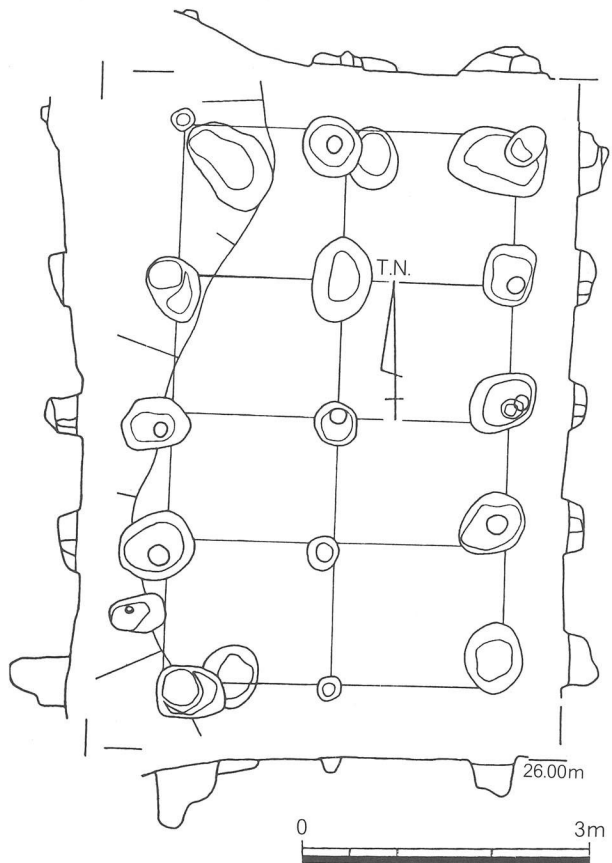


写真58 SB04全景（南より）

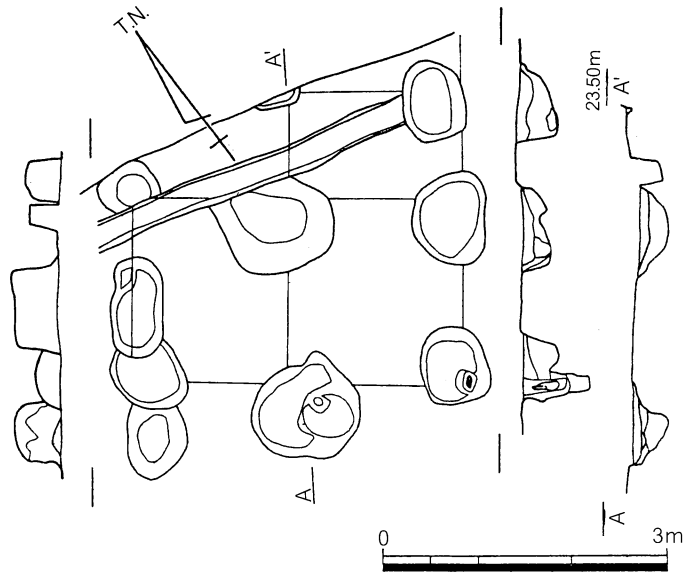


第40図 SB04平・断面図(1/80)

SB07 II c区中央でSB08と隣接して検出した、南北棟の総柱の掘立柱建物である。調査区中央の里道の関係で南半分のみ検出した。桁行2間以上（3.0m）×梁間2間（3.4m）面積10.2㎡以上を測り、主軸方位はN37°Eを測る。柱穴掘形平面は不整円形、断面は不整U字状を呈し、径0.6～1.2m 深さ0.3～0.7mを測る。埋土は暗灰色系の粘土と黄灰褐色系の粘土よりなる。なお、南東端の柱穴より柱材を検出した。出土遺物は弥生土器と土師器の細片だけである。そのため詳細な時期については問題を残

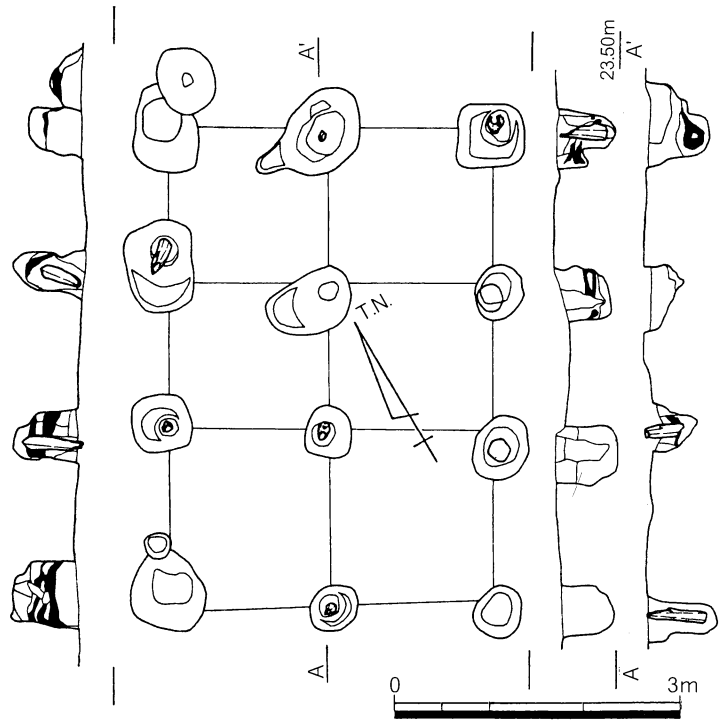
すが、8世紀の包含層を除去した遺構面上より検出した関係上7世紀代の可能性がある。

S B 08 II c 区中央でS B 07と隣接して検出した。南北棟の総柱の掘立柱建物である。桁行3間(4.8m)×梁間2間(3.5m)面積16.8㎡を測り、主軸方位はN30°Eを測る。柱穴掘形平面は不整円形、断面は不整U字状を呈し、径0.5~1.0m 深さ0.3~0.7mを測る。埋土は淡黒色系の粘土と黄灰褐色系の粘土よりなる。柱穴の中には先の2種類の埋土を互層に埋め込み、柱を締め固めている柱穴もある。なお、12柱穴中5柱穴より柱材を検出した。出土遺物は柱材以外は土師器の細片だけである。そのため詳細な時期については問題を残すが、先のS B 07同様8世紀の包含層を除去した遺構面上より検出した関係上7世紀代の可能性がある。



第41図 S B 07 平・断面図(1/80)

S B 10 II c 区中央でS B 11と隣接して検出した。南北棟の総柱の掘立柱建物である。桁行2間(4.2m)×梁間2間(3.6m)面積15.1㎡を測り、主軸方位はN10°Eを測る。柱穴掘形平面は不整円形、断面は不整U字状を呈し、径0.4~0.5m 深さ0.1~0.4mを測る。埋土は黄灰褐色系の粘土を含む灰色系の砂質土である。出土遺物は須恵器杯・甕、土師器の細片等である。この建物は出土遺物及び検出面より当該期に含めたが、時期については再考の余地がある。なお、西に隣接して所在するS B 11は、この建物とほぼ同一規模であり、棟方向も合わせている。そのためS B 10とS B 11は同時併存の可能性が高い。



第42図 S B 08 平・断面図(1/80)

S B 11 II c 区中央でS B 10と隣接して検出した、南北棟の掘立柱建物である。桁行2間(4.3m)×梁間2間(3.7m)面積15.9㎡を測り、主軸方位はN11°Eを測る。柱穴掘形平面は不整円形、断面は不整U字状を呈し、径0.3~0.5m 深さ0.1~0.2mを測る。埋土は黄灰褐色系の粘土を含む灰色系の砂質土である。出土遺物は須恵器、土師器の細片だけである。そのため詳細な時期については問題を残すが、配

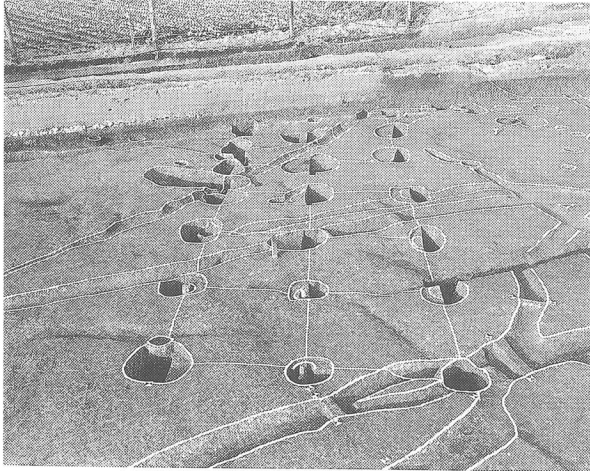


写真59 S B 07・08 全景 (南より)

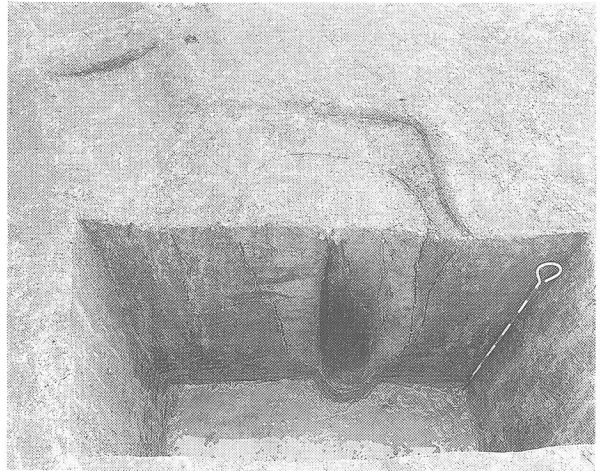


写真60 S B 08 柱穴断面 (北より)

置上の点より S B 10 とほぼ同時期と考えられる。

SD03 II a 区西端より, II b 区南半部を直線状に東西に延びる大型の溝である。後世の削平により部分的に途切れている。検出長45.0m 幅 4.2m 深さ 1.2m を測る。主軸方位は $N84^{\circ} W$ を測る。断面は幅広で不整形な V 字状ないしは U 字状を呈し, 埋土は乳灰色系の砂質土を呈する。出土遺物は, 8 世紀前半の遺物が主体を占める。主要な遺物は須恵器杯・高杯・壺・甕, 土師器片等がある。先にも触れたが, SD03 周辺からは当該期の遺構は皆無である。

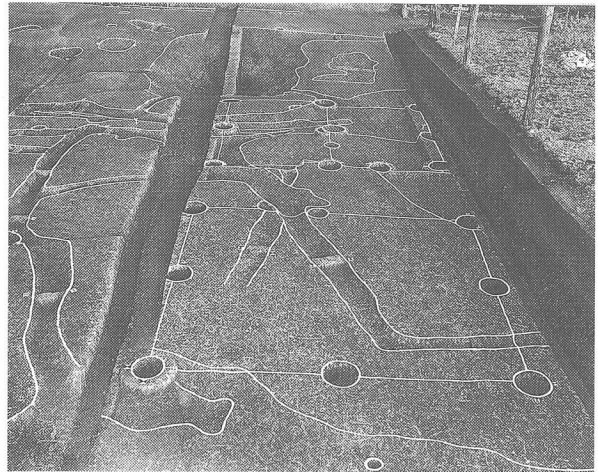
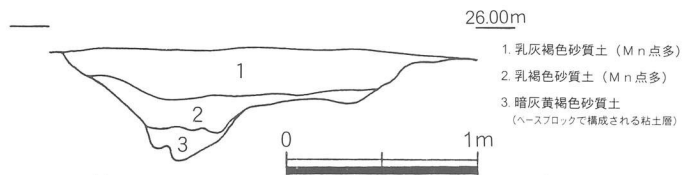


写真61 S B 10・11 全景 (西より)

そのため SD03 が, 集落の南限を画する溝状遺構である可能性が高い。また, この溝状遺構は周辺域の条理地割に符合する。



第43図 SD03 土層断面図 (1 / 40)

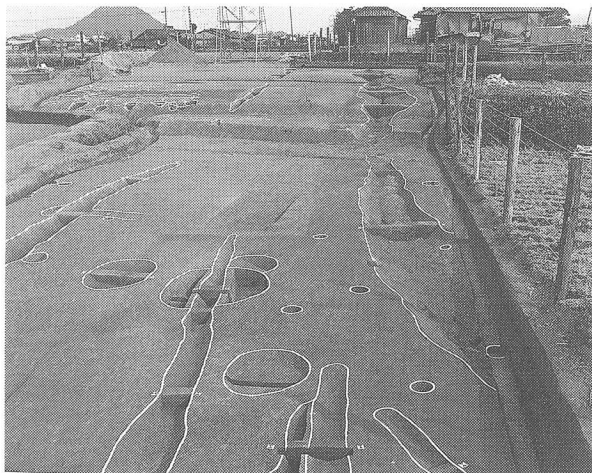


写真62 SD03 全景 (西より)



写真63 SD03 土層断面 (西より)

S D12 II d区東端部上層遺構面で検出した不整形な東西溝である。溝東部より小規模な木樋（S X 02）を検出した。検出長16.5m 幅0.6m 深さ0.25mを測る。主軸方位はN80° Eを測る。断面形は浅いU字状ないしは浅い皿状を呈する。埋土は黒色系の粘土及び暗灰色系の砂質土よりなる。出土遺物は、須恵器杯・平瓶、土師器片、桃核等である。出土遺物は6世紀末の遺物が中心であるが、検出状態より8世紀前半頃の時期が考えられる。なお、この溝はII c区のS X01につながる可能性が高い。

S D12より検出した木樋（S X02）は、円筒状の木材を素材に用い、縦に二分割した合口型の形態を呈する。長さ150cm 幅20cmを測る。三辺に杭を打ち、木樋との間に小さな板を挟んで木樋を固定している。木樋底部には高さの調整のためか、長さ50cm程度の小さな板を、木樋に直交する形で東西二箇所設置している。検出状況よりこの木樋は、S D12に直交するS D13・14等の周囲の溝群に流れを振り分ける機能が考えられる。

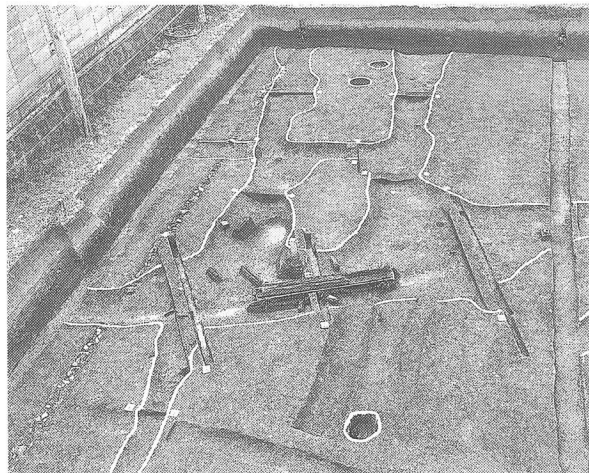


写真64 S D12全景（北より）



写真65 S X02全景（北より）

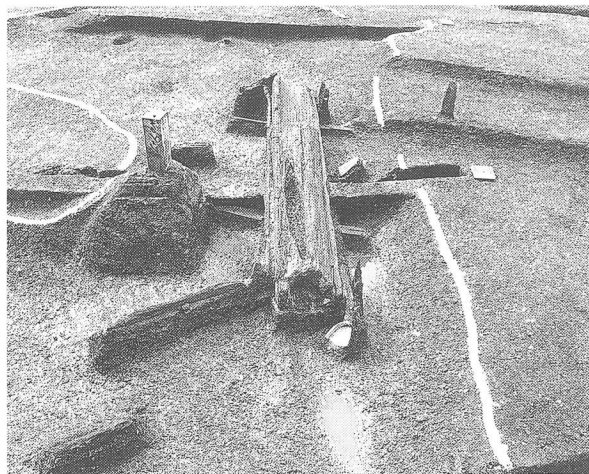


写真66 S X02全景（東より）

S X01 II c区南東部で検出した「出水」状の遺構である。平面形は東西に長い長楕円形、断面形は鈍い楕円状を呈する。なお、数条の小規模な溝がこの溝に合流している。長径5.5m 短径4.0m 深さ0.7mを測る。埋土は上・下2層に区分できる。上層は淡灰色系の粘土、下層は淡黒色系の粘土である。出土遺物は8世紀前半の遺物が上層を主体に出土している。主要な遺物としては須恵器杯・高杯・甕、土師器片、板状木製品、桃核等である。

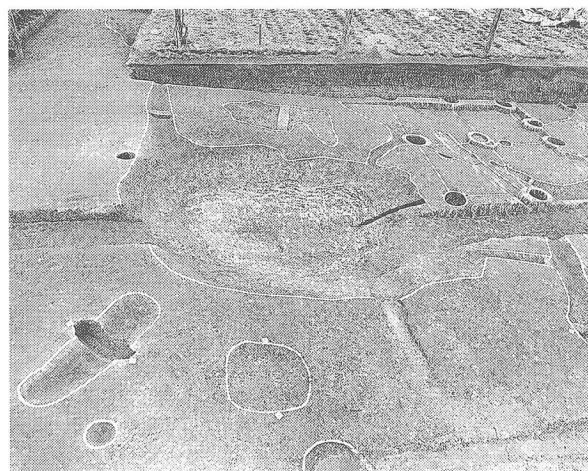


写真67 S X01全景（北より）

(3) 近世後半

当該期の遺構はⅡ a区を中心にⅡ b区まで広がる。主要な遺構では、SE01・02、SD01・02、ST01～05等である。なお、Ⅱ a区東端部には柵列、大型土坑等近世に属する遺構を多数検出している。また、これらの遺構群は近世後半を中心とする時期が考えられる。SD01・02は規模及びその配置より区画溝と考えられる。なお、その区画内に所在するSB09とは时期的に類似する可能性がある。ST01～05はⅡ a区東端部に集中し当該地が一時期墓地として占有されていたことがわかる。

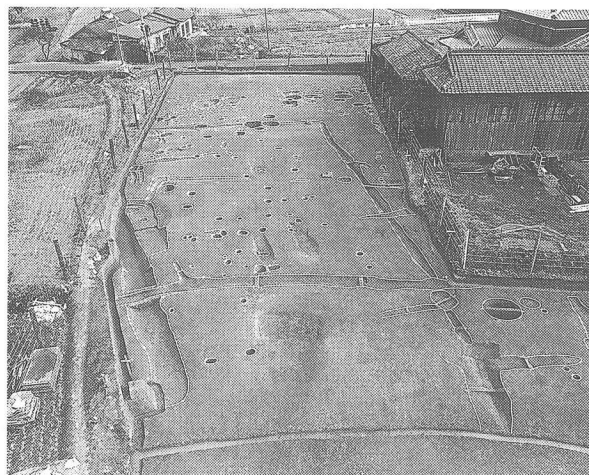


写真68 Ⅱ a区全景（西より）

ST02 Ⅱ a区東端部でST01に隣接して検出した墓である。墓坑平面は長楕円形状を呈し、底部には小さな凹を掘り込んだ後骨壺を据えている。断面形は浅い皿状を呈する。長径2.4m 短径1.4m 深さ0.2m埋土は灰色系の粘土である。骨壺は口径34cmを測る土師器の円筒形の壺で、内部には淡灰色の灰が検出された。なお、性格は不明であるが、壺の縁に小さな棒状の木製品を設置している。出土遺物としては墓坑中より土師器及び陶器の細片が出土しているだけで詳細な時期については問題を残すが、大まかな点では近世後半の範疇で考えられる。

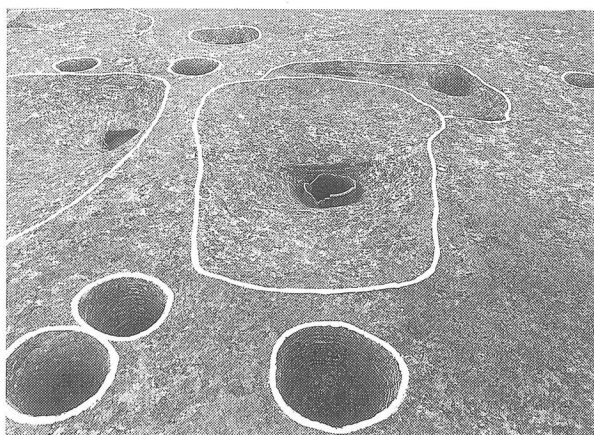


写真69 ST02全景（西より）

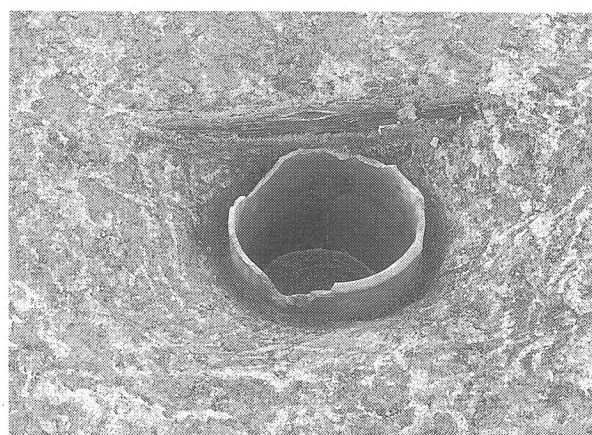
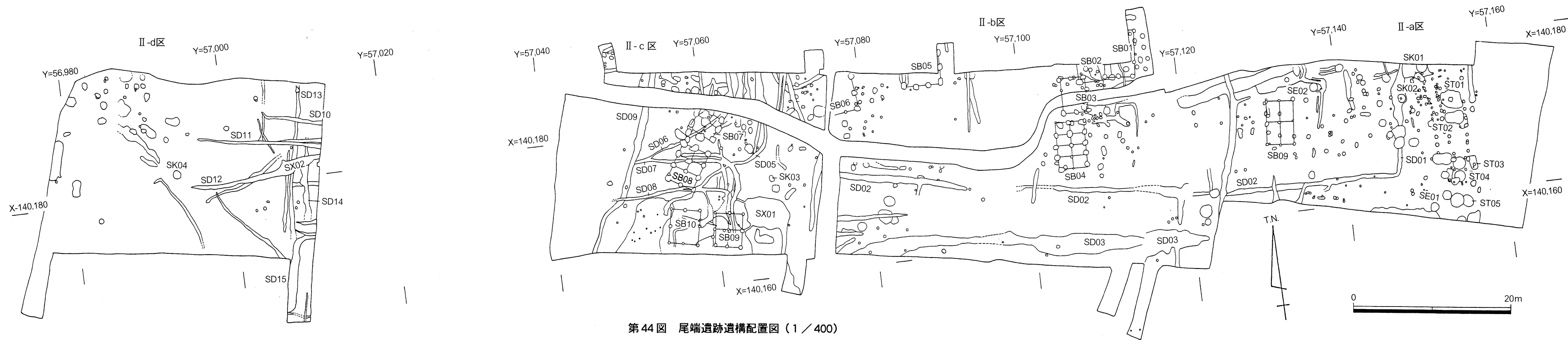


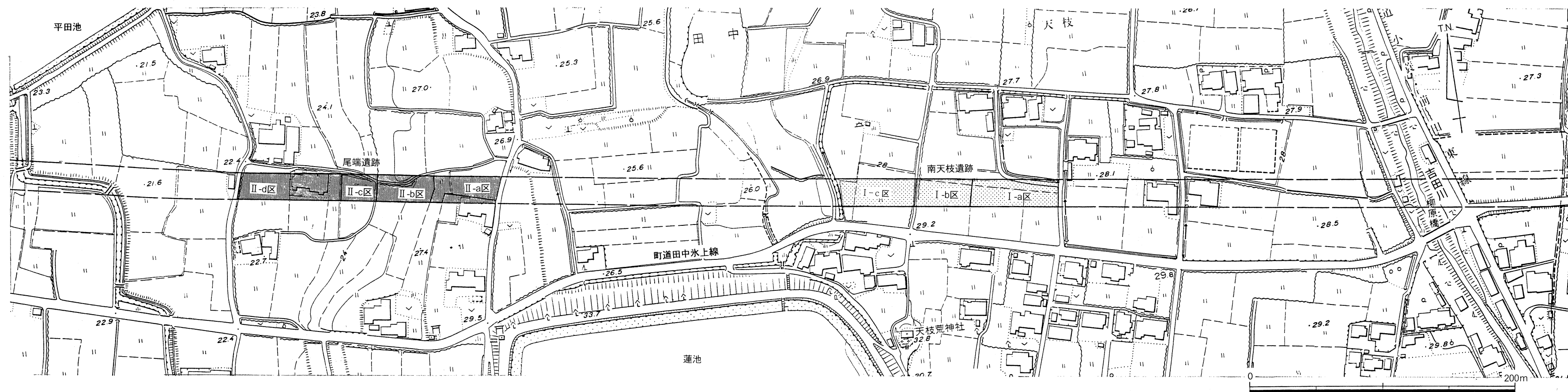
写真70 ST02細部（西より）

調査区	遺構名	規模・構造 桁行×梁行 (m)	面積 (㎡)	主軸方位	備考	検出時遺構名
Ⅱ-b区	SB01	3間(5.8)×2間(3.7)	21.46	N-7°-E		SB01
Ⅱ-b区	SB02	1間以上(1.7)×2間(4)	6.8以上	N-0°		SB02
Ⅱ-b区	SB03	3間(4.2)×2間(4)	13.44	N-1°-E		SB03
Ⅱ-b区	SB04	4間(5.3)×2間(3.5)	18.55	N-0°	総柱	SB04
Ⅱ-b区	SB05	3間(4.7)×2間(3.7)	17.39	N-87°-W		SB05
Ⅱ-b区	SB06	2間(4)×1間以上(1.6)	6.4以上	N-5°-W		SB06
Ⅱ-c区	SB07	2間以上(3)×2間(3.4)	10.2以上	N-37°-E		SB01
Ⅱ-c区	SB08	3間(4.8)×2間(3.5)	16.8	N-30°-E	総柱	SB02
Ⅱ-a区	SB09	2間(5.5)×2間(3.3)	18.15	N-3°-E	総柱	SB01
Ⅱ-c区	SB10	2間(4.2)×2間(3.6)	15.12	N-10°-E	総柱	SB03
Ⅱ-c区	SB11	2間(4.3)×2間(3.7)	15.91	N-11°-E		SB04

表2 尾端遺跡掘立柱建物一覧表



第44図 尾端遺跡遺構配置図 (1/400)

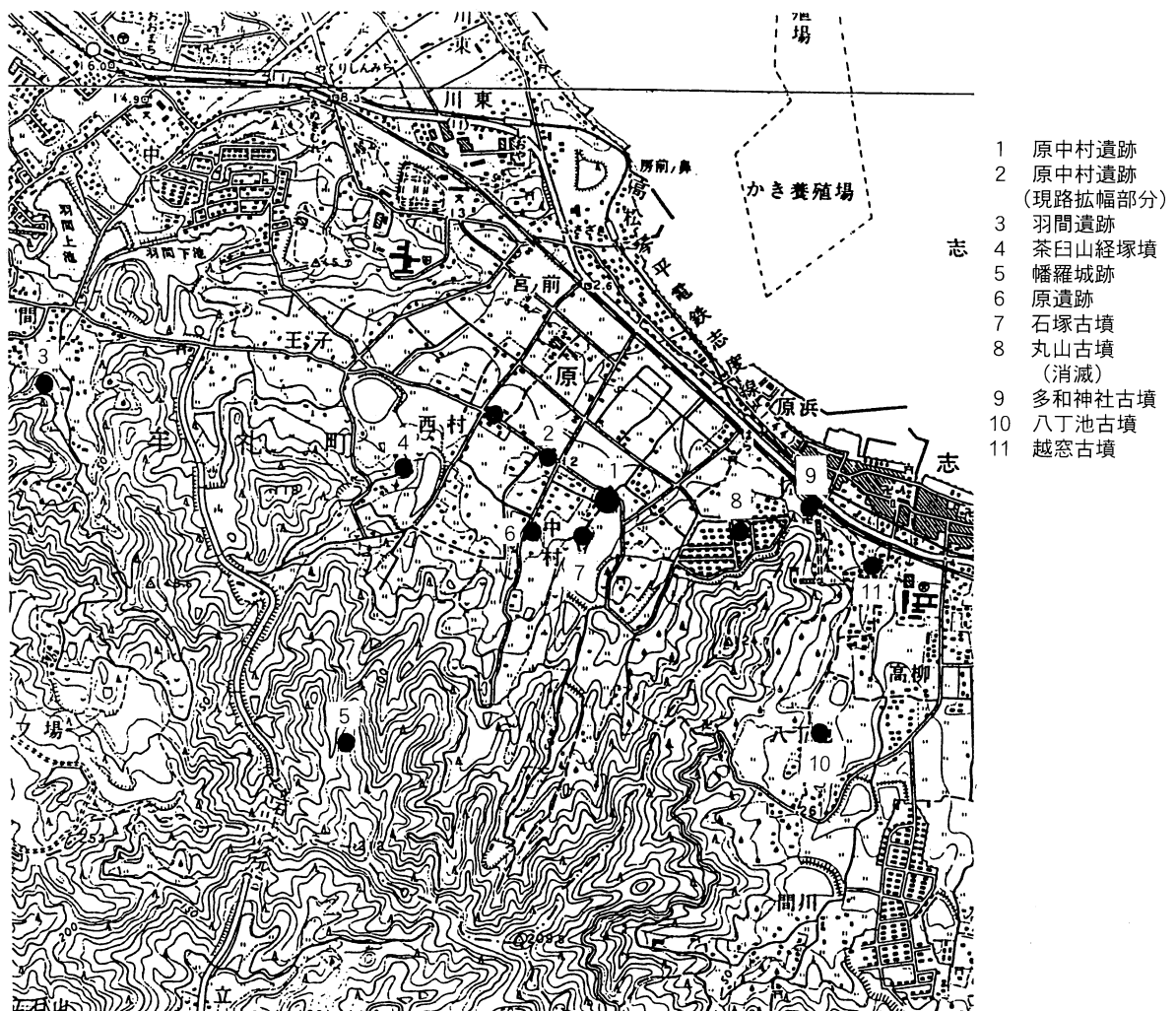


第45図 尾端遺跡調査区配置図 (1/2,500)

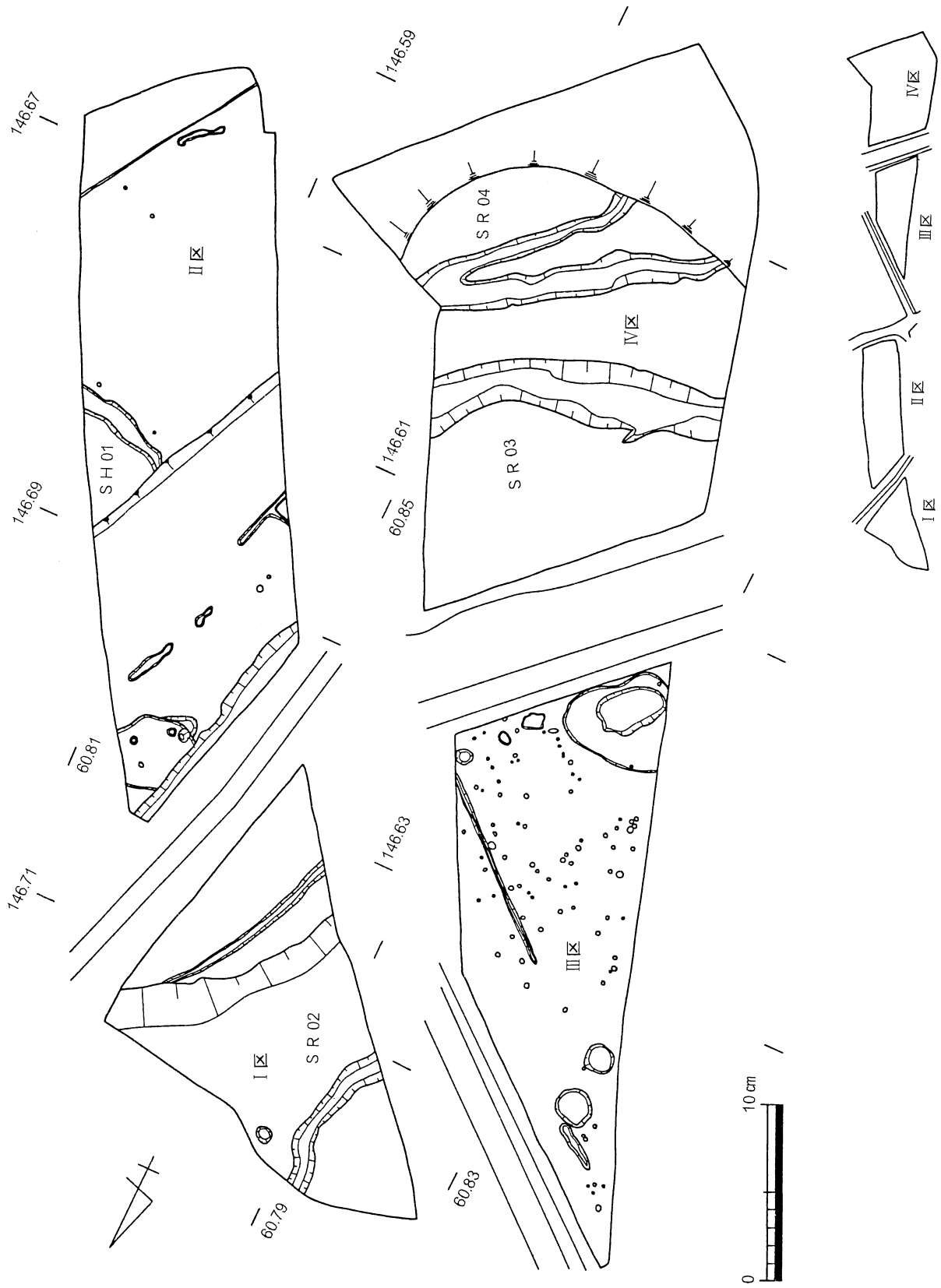
VIII. 原中村遺跡

1. 立地と環境

原中村遺跡は、木田郡牟礼町原に所在する。調査区は高松琴平電鉄原駅から南西の方向へ約500mのところ、北西から南東にかけての延長約100mの範囲である。地形的には、南側の山塊から緩やかに広がる扇状地の入り口付近にあたり、標高は12m前後を測る。調査区の西側には現道拡幅部分の原中村遺跡が所在し、平成6年度の県教育委員会の発掘調査で奈良時代の掘立柱建物跡などを検出している。また、今回の発掘調査場所の南西方向約300mのところでは、多量の弥生土器の完形品が出土した原遺跡が所在している。この遺跡は『弥生式土器集成 本文篇』に掲載されている香川県における弥生時代後期後半ごろの標識遺跡として著名であり、器種的にも壺・甕・高杯・鉢等多岐にわたるが、実態は不明な点が多い。周辺では同時代の集落跡は発見されていないが、調査区東側の丘陵部においては、団地造成に伴い、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土している。その他には調査区の南側に石塚古墳、前述の団地造成によって消滅した丸山古墳、東側の丘陵の先端部の多和神社古墳等が所在する。



第46図 周辺の遺跡分布図



第47图 原中村遺跡遺構配置図

2. 調査の概要

調査は、現道拡幅部分と新規建設部分との境界から南へ約300mほどの間、約1,500㎡を対象面積として実施した。

調査区は、調査対象地が直線的に伸びる道路予定地であるため、道路の中心点を結んだ線を基準として調査区を南からⅠ～Ⅳ区の4つに設定した。調査着手前は、水田であり、Ⅱ・Ⅲ区が南西から派生する尾根上に位置する。また、現在の地形及び周辺の状況からみて、Ⅰ・Ⅳ区は谷状を呈するものと推定されていた。

調査は、尾根上に位置するⅡ・Ⅲ区から着手し、終了後に引き続きⅠ・Ⅳ区の調査を実施した。調査の結果、Ⅱ・Ⅲ区は後世の削平により水田化されたもので削平された面が調査区の西側で明瞭に観察できる。また、Ⅳ区の東半部は約30年ほど前に大規模な構造改善事業が実施されており、その際にかなり攪乱されている。

基本層序は、Ⅱ・Ⅲ区においては耕作土直下で遺構検出面である黄色粘土層となる。Ⅰ・Ⅳ区では耕作土下に遺物包含層である黄褐色砂質土および黄茶褐色粘質土が堆積し、旧河道および湿地帯であることを示す黒色粘質土やシルト層の下層に地山である青灰色粘土が認められる。

遺構は、前述のとおり、Ⅲ区では耕作土直下の黄色粘土層上で柱穴群や大型の土坑を数基検出した。土坑からは陶器（唐津）の椀等が出土しており、これらの遺構群は江戸時代に属するものと考えられる。Ⅱ区ではやはり黄色粘土層上で竪穴住居跡1棟を検出した。Ⅰ・Ⅳ区では多量の遺物を包含する自然河川跡を検出している。以下、これらの遺構についてその概略を述べる。

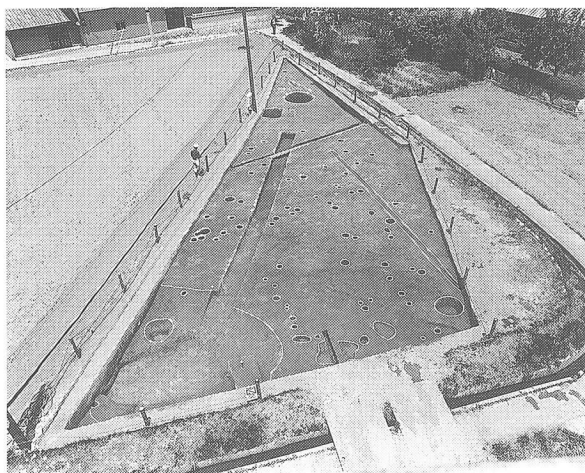


写真 71 Ⅲ区全景（南より）

(1) SH01

Ⅱ区の中央付近の東端で検出した竪穴住居跡である。現状は水田であるが、北西側は後世の削平により約1m地下げしており、また、東側は調査区外になるため、全体の規模は不明である。しかしながら残っている部分の遺存状況は良好であり埋土の深さは40cm～50cmを測る。検出した部分の中央やや南東部分には、幅約60cm、長さ1m以上の炉があり、内部から遺物が出土している。また支柱穴は1個しか検出していない。また、検出した部分では炉の周囲にベッド状遺構が認められた。南側の一部では壁溝と考えられる溝状の遺構も検出している。埋土は色調の異なる2種類の砂質土からなり、多量の遺物を包含していた。

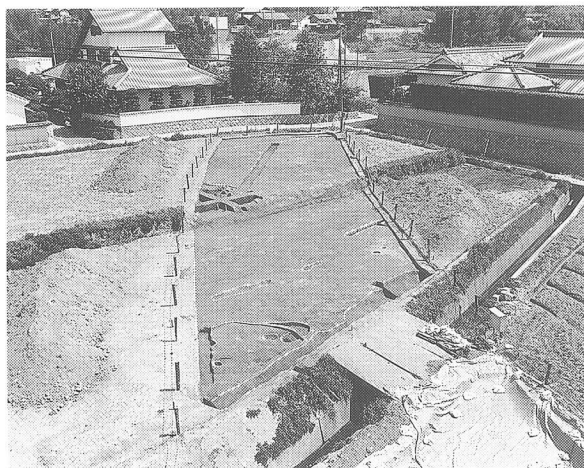


写真 72 Ⅱ区全景（北より）

第4図はSH01から出土した遺物である。

1は壺である。体部上半部および頸部はハケ目調整、下半部はヘラ磨き調整を施している。2は底部である。内面にわずかに指頭圧痕が認められる。3は無頸壺である。4は肌色を呈する胎土の壺である。口縁端部は直立させており、丸くおさめる。5～7は甕である。体部から直線的に続き、ほぼ水平に広がる短い口縁部を持つもの（5・7）とやや外反しながら斜め上方へ開く口縁部をもつもの（6）とがある。8～10は鉢である。8は大型のもので外面には丁寧なハケ目調整が顕著である。9・10は小型のもので10は明確な平底を呈する。11はミニチュ

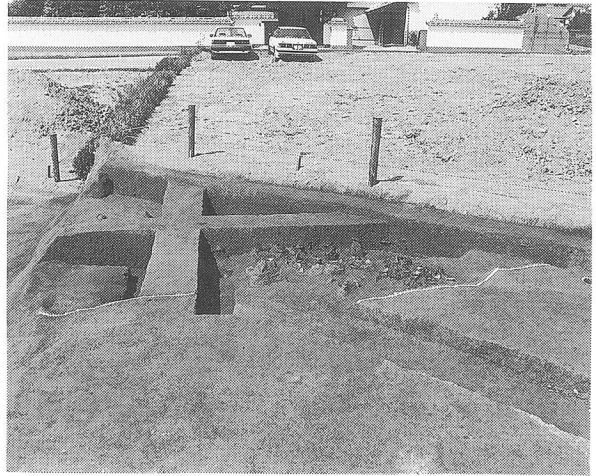
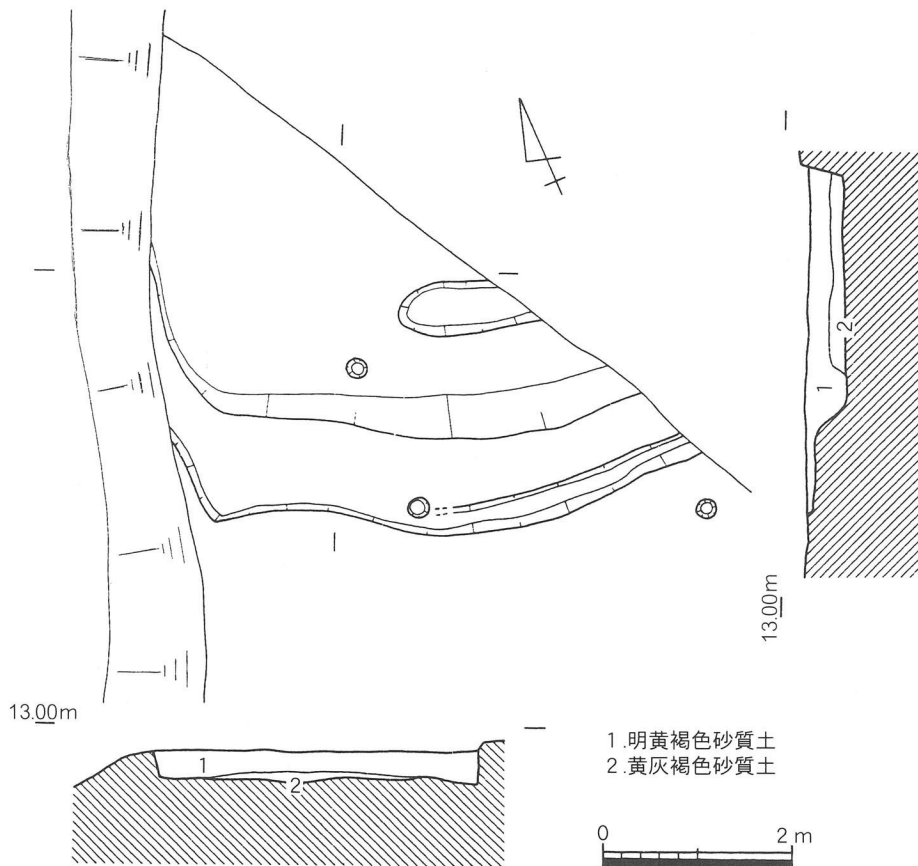


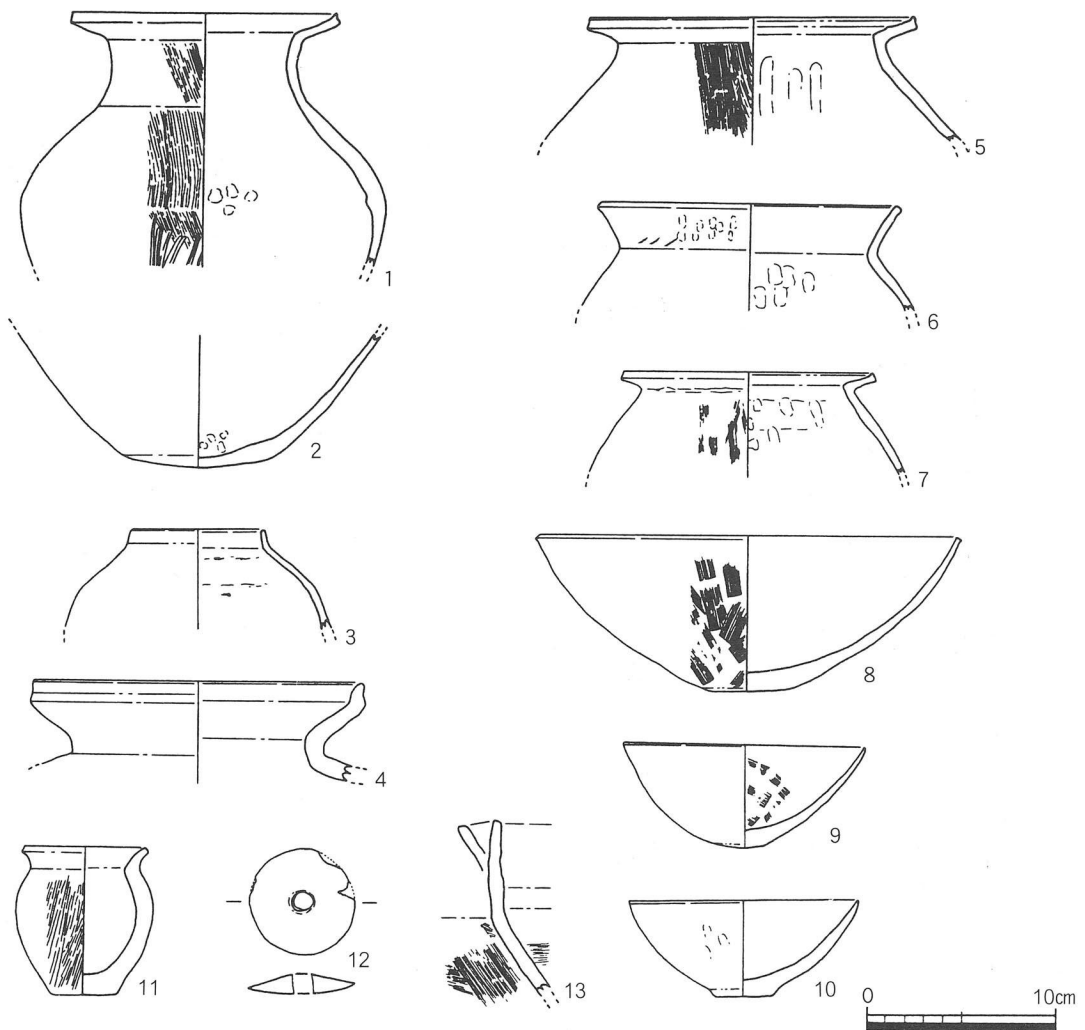
写真73 II区SH01（西南より）



第48図 SH01平・断面図

アの甕で、12は土製の紡錘車である。13は大型の片口鉢の口縁部である。いずれも弥生時代後期後半の所産であろう。

また、これらのうち、1・3・6・7・10・11・13は炉の内部より一括して出土し、8は唯一検出した主柱穴から内面を上にした状態で出土した。このことは該期の竪穴住居の廃絶に関連した何らかの祭祀を示すものである可能性を考えさせる。



第49図 SH01 出土遺物実測図

(2) SR02

I区で検出した自然河川跡である。東側の岸は検出したが、西側は調査区外へ延びるため、幅は不明である。検出した部分での幅は約15mで、南から北へ向かって緩やかに流れる。自然河川としての埋土は6層に分けられるが、その上層に湿地帯であることを示す黒色粘質土が堆積しており、平安時代までの遺物を包含しており、中には「十」の字を墨書した須恵器の蓋も出土しており、周辺に識字層の存在を示唆させる。さらに上層には洪水砂層である黄褐色の砂質土が厚く堆積している。自然河川としての埋土中からは多量の土器が出土しているが、これらは東側の岸に近い部分で流れに平行するように出土した。遺存状況も良好で、投棄されてまもなく埋没した状況が看取される。

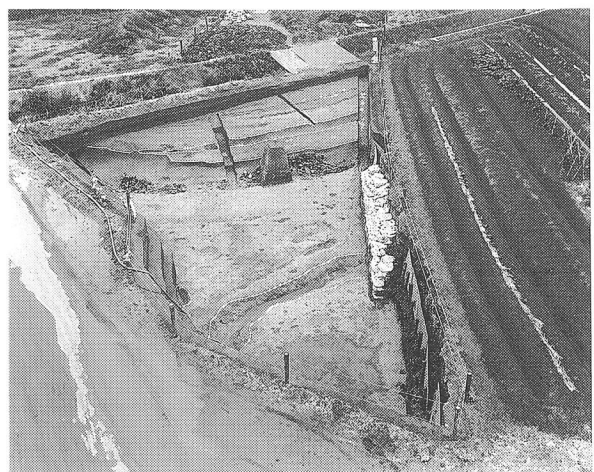
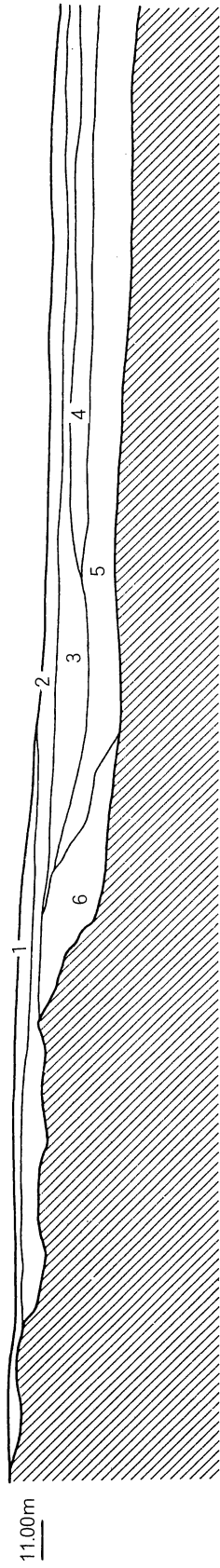
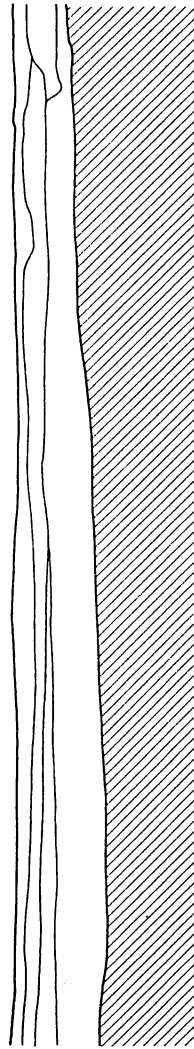


写真74 I区全景（北より）



- 1 暗灰褐色砂質土
- 2 褐灰色粗砂層
- 3 暗褐色粘土層
- 4 暗灰褐色粘土層
- 5 灰黑色粘土層
- 6 暗灰褐色砂混粘質土



第50図 S R 02土層断面図

- 1 暗灰褐色砂質土
- 2 褐灰色粗砂層
- 3 暗褐色粘土層
- 4 灰褐色砂混粘質土
- 5 暗灰色砂質土
- 6 暗青灰色シルト
- 7 暗青灰色シルト
- 8 明黄灰色砂混粘質土
- 9 明灰色シルト

11.90m



第51図 S R 03・04土層断面図

第7図はSR02から出土した遺物の一部である。14～17は壺である。14は体部からやや直立気味に立ち上がる頸部を持ち、口縁部はほぼ水平に折り返している。内面に指頭圧痕が顕著に認められる。15は短い頸部を持ち、口縁端部はやや肥厚する。16は直立する頸部から大きくほぼ水平に開く口縁部を持つ。口縁端部には凹線状の強いナデ調整が認められる。17は外反しながら外方へ開く口縁部を持つ壺である。18は長頸壺の口縁部である。体部は欠損しているが、算盤玉のような体部を持つものと思われる。内面には指頭圧痕が認められる。19～21は甕である。19は口縁端部に面を持つ。口縁部と体部との境に強いナデ調整による段が認められる。内面にはわずかに指頭圧痕が認められる。底部は明確な平底を呈する。18は余り張り出さない体部から緩やかに「く」の字状に外反する口縁部を持つ。端はやや丸くおさめている。外面にはタタキ調整が顕著に認められ、内面の下半部にはヘラ削り調整がわずかに確認できる。上半部には板ナデと思われる痕跡が認められる。21はミニチュアの甕である。プロポーションは19によく似ており、大きく張り出す体部が特徴的である。22は大型の鉢である。体部から口縁部まで大きく外方へ開き、やや安定感に欠ける。内面には板ナデおよびハケ目調整が認められる。23は脚付鉢の底部である。外面にはヘラ削りの痕跡が顕著に認められ、高台状の底部が付く。24～25は小型丸底壺である。25は算盤玉のような体部からやや内湾しながら上方へ伸びる口縁部を持ち、端部は鋭い。全体的に非常に丁寧な作りで同様の小型丸底壺の個体数は多い。27は高杯である。脚部が欠損しているが接合面が観察できる。内面には丁寧なヘラ磨き調整が規則正しく認められる。28は高杯の脚部である。2個並びの透し孔が3カ所に見られる。29は管状の土錘と考えられる土製品である。ほぼ球形を呈しており、中心に管状の孔が通っている。

SR02から出土した土器はいずれも弥生時代後期後半ごろの所産であり、東側のSH01出土の土器と同時期と考えられる。したがって、SR02は集落の西側を流れていたものであり、多量の土器等を一括して投棄したものであろう。

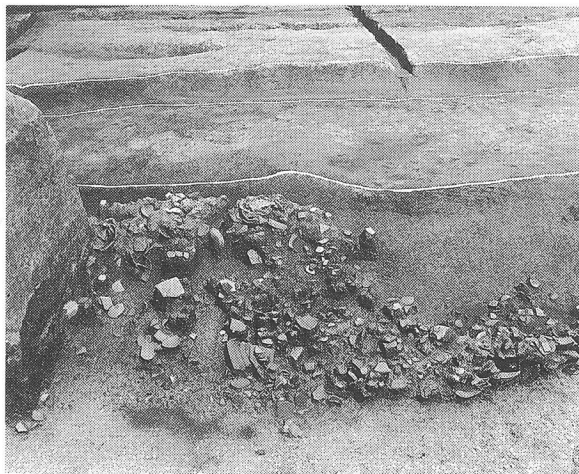


写真75 I区SR02遺物出土状況

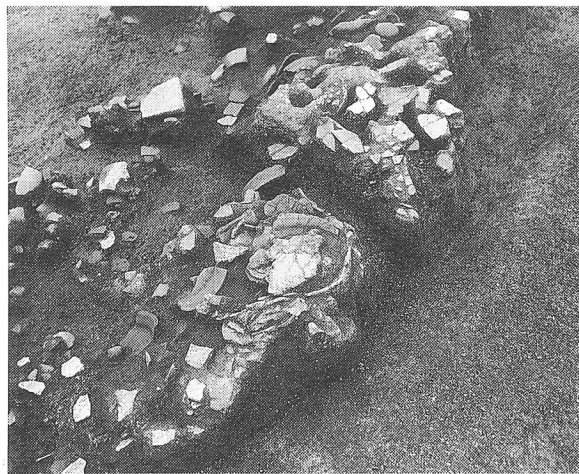
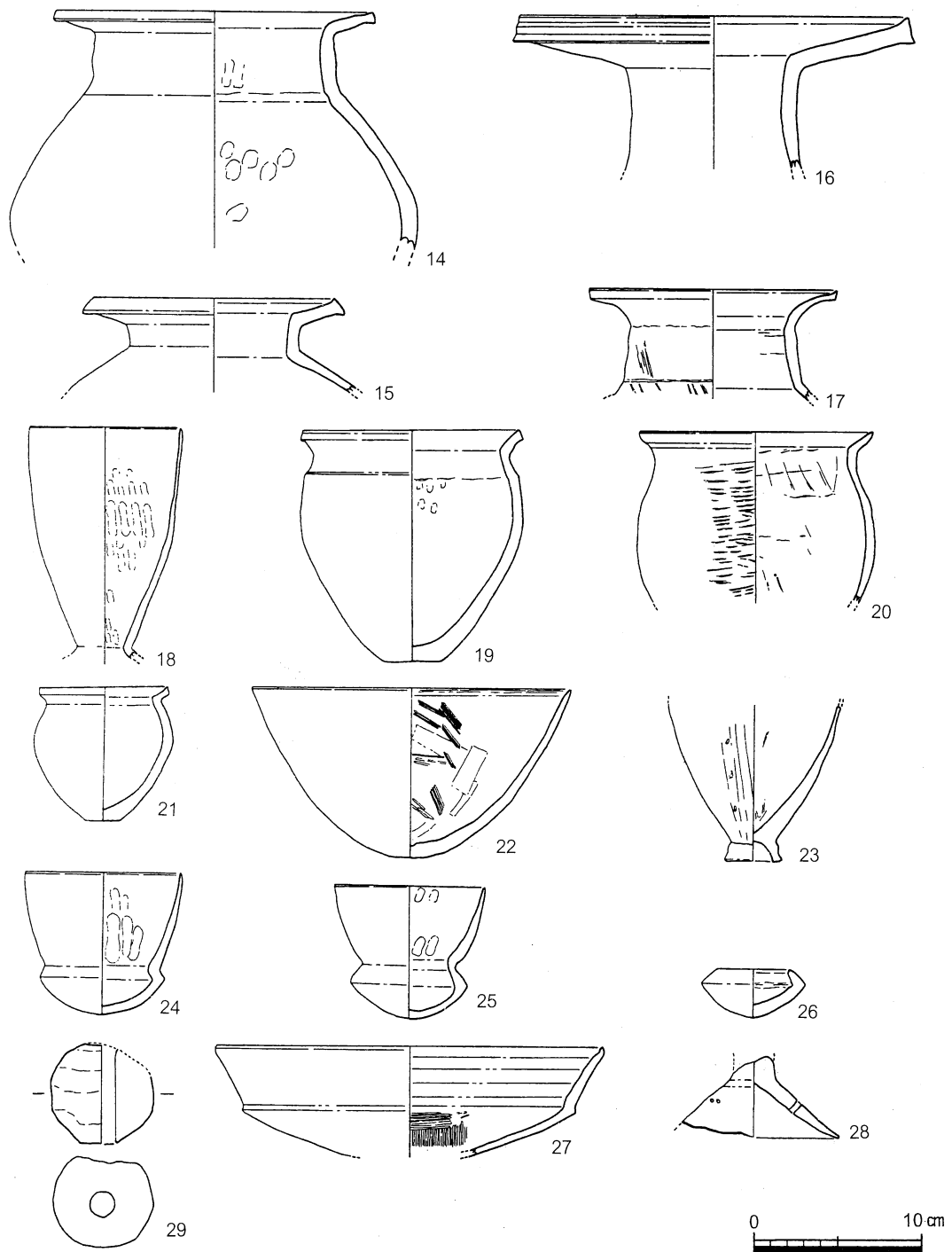


写真76 I区SR02遺物出土状況



第52図 S R 02 出土遺物実測図

(3) S R03・04

IV区で検出した自然河川跡である。S R03は幅3～4m、深さ約70cm、S R04は2条に分かれていたものが東端部分で合流する。合流部の幅は3m、深さは約70cmである。S R03・04の上層には湿地帯を示す黒色粘質土が堆積しており、大量の遺物を包含している。したがってS R03・04はある時期、広い低湿地状を呈していたものと考えられる。流路の方向はおおむね西から東へ向かって緩やかに流れるが、S R04の東側は数十年前の構造改善事業によって削られた状態であった。



写真77 IV区SR03土层断面

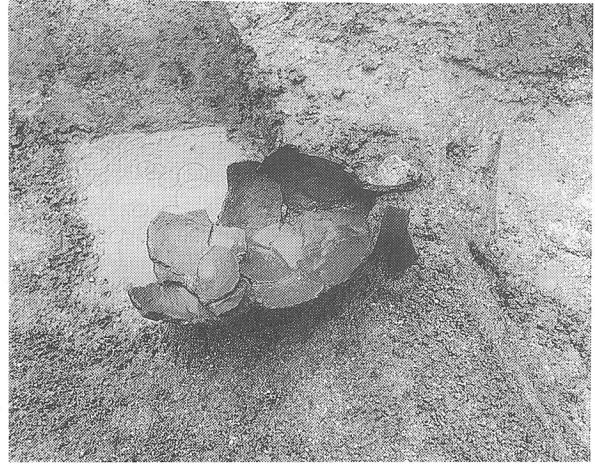
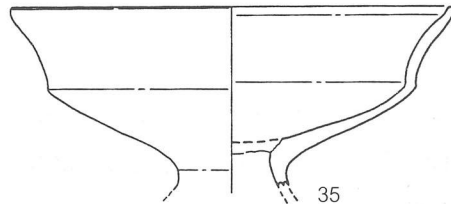
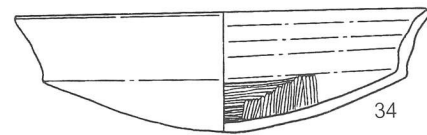
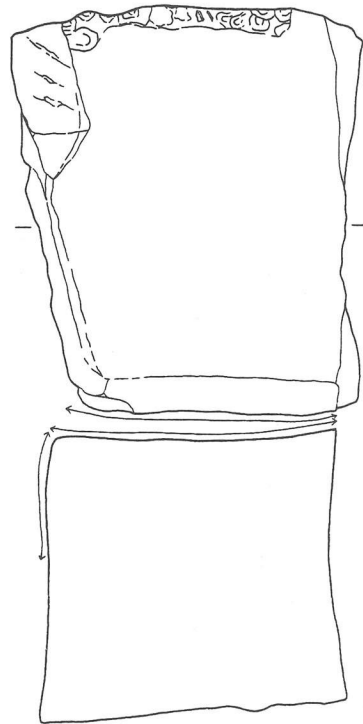
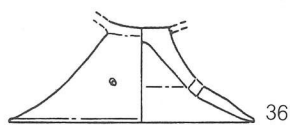
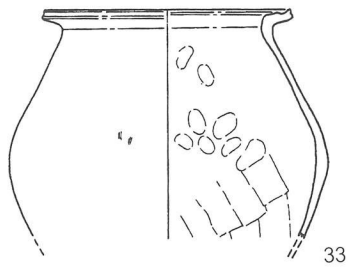
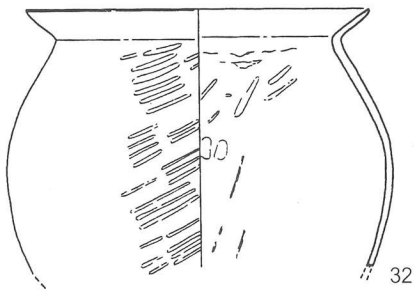
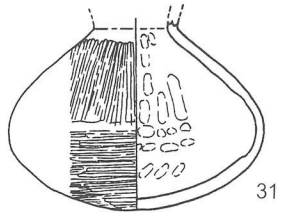
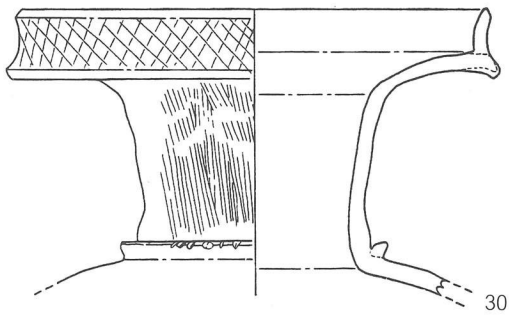


写真78 IV区SR03遺物出土状況



第53图 IV区SR03出土遺物実測図

第8図は、SR03から出土した遺物の一部である。

30は壺である。体部と頸部の境に列点文の施された貼り付け突帯が巡らされている。口縁部は頸部からほぼ水平に外側に広がる。口縁端部は上下方向に肥厚させており、断面形は三角形を呈する。口縁端部の外側には綾杉文が全体に巡らされている。胎土は粗く、白っぽい灰色を呈する。31は長頸壺の体部である。算盤玉に似ており、大きく張り出す肩部を持つ。頸部は欠損しているが、ほぼ直立する長い頸部を持っていたものと考えられる。32・33は甕である。「く」の字に外反する口縁部を持ち、口縁端部はやや尖り気味におさめる。外面には全体にタタキ調整が顕著に認められ、内面にはわずかに指頭圧痕の痕跡が認められる。34は鉢である。一見、高杯の杯部にも見えるが、脚部との接合面が全く認められず、鉢と判断した。35は高杯の杯である。36は高杯の脚部である。透し孔が3カ所に認められる。37はミニチュアの甕である。38は砥石である。安山岩製で他にも数点出土している。土器類はいずれも弥生時代後期後半ごろのものであろう。

3. まとめ

今回の原中村遺跡の調査で、この付近に弥生時代後期後半ごろの集落の存在が確実となり、従来、原遺跡として知られていた部分も恐らくこの集落の一部であることは間違いないであろう。人々の存在を窺わせる遺構は竪穴住居跡のみであるが、自然河川に投棄されていた多量の弥生土器や従来から知られている弥生時代後期後半ごろの完形の土器の出土からみて、かなり大規模な拠点集落が当該地付近に存在していたものと考えられる。また、いわゆる下川津B類土器の割合が比較的多いことから高松平野の中央部の拠点集落との活発な交流を示す資料となるであろう。

今後は、出土した大量の土器の分析を実施し、より細かな年代観の確立、集落の存続期間、また、弥生時代以降の集落の変遷、西側の奈良時代の遺構との関わりといった面を考察する必要があるものと考えられる。

IX. 寺田・産宮通遺跡

1. 遺跡の立地と環境

寺田・産宮通遺跡は香川県東部の大川郡大川町富田西に所在する。大川町は南北及び東の三方を山塊に囲まれており、西方の寒川町に向かって平野部が広がっている。南方の讃岐山脈からはこの平野部に向かって多くの低丘陵が北に延びており、その低丘陵間を古川、爛川等の小河川が北流しており、平野北端付近で津田川と合流する。本遺跡は讃岐山脈から北西方向に向かう低丘陵部の末端に位置し、南端部を県道10号線に接し、途中を古川に分断されつつ北東に約800メートル直線的に延びている。

周辺には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が広範囲に分布している。弥生時代後期のものでは本遺跡西方に寺田大角遺跡があり、さらにその南方の讃岐山脈の尾根の麓や微高地には布勢遺跡、石田高校校庭遺跡、加藤遺跡などで知られる大規模遺跡集落の森広遺跡群が広がっている。また、北方には集団墓群で知られる大井遺跡があり、さらにその北方には中世の山城としても知られる雨滝山があり、西麓から南麓にかけて多数の遺跡が散在している。古墳時代の遺跡としては四国最大の前方後円墳である富田茶臼山古墳をはじめ、前期のものとしては奥3号・13号・14号墳、中期のものとしては寺尾古墳群、大井七つ塚古墳群などの古式群集墳、後期のものとしては東讃地域最大の横穴式石室を持つ中尾古墳などの大型円墳が築造されるほか、天王山古墳群、葦神古墳群、葦神東古墳群、大末古墳群、相ノ山古墳群、極楽寺古墳群などの群集墳が形成される。古代に関して、この付近は条里型地割が比較的明瞭に残っている地域であり、本遺跡の南方を推定南海道が通っている。その沿道の遺跡としては、まず七葉複弁蓮花文鏡瓦など奈良時代の瓦で知られる下り松麿寺跡、四天王寺式伽藍配置をもつ白鳳時代の寺院である極楽寺跡などがある。また近年、本村・横内遺跡では奈良・平安時代の掘立柱建物跡等の遺構、遺物が報告されている。

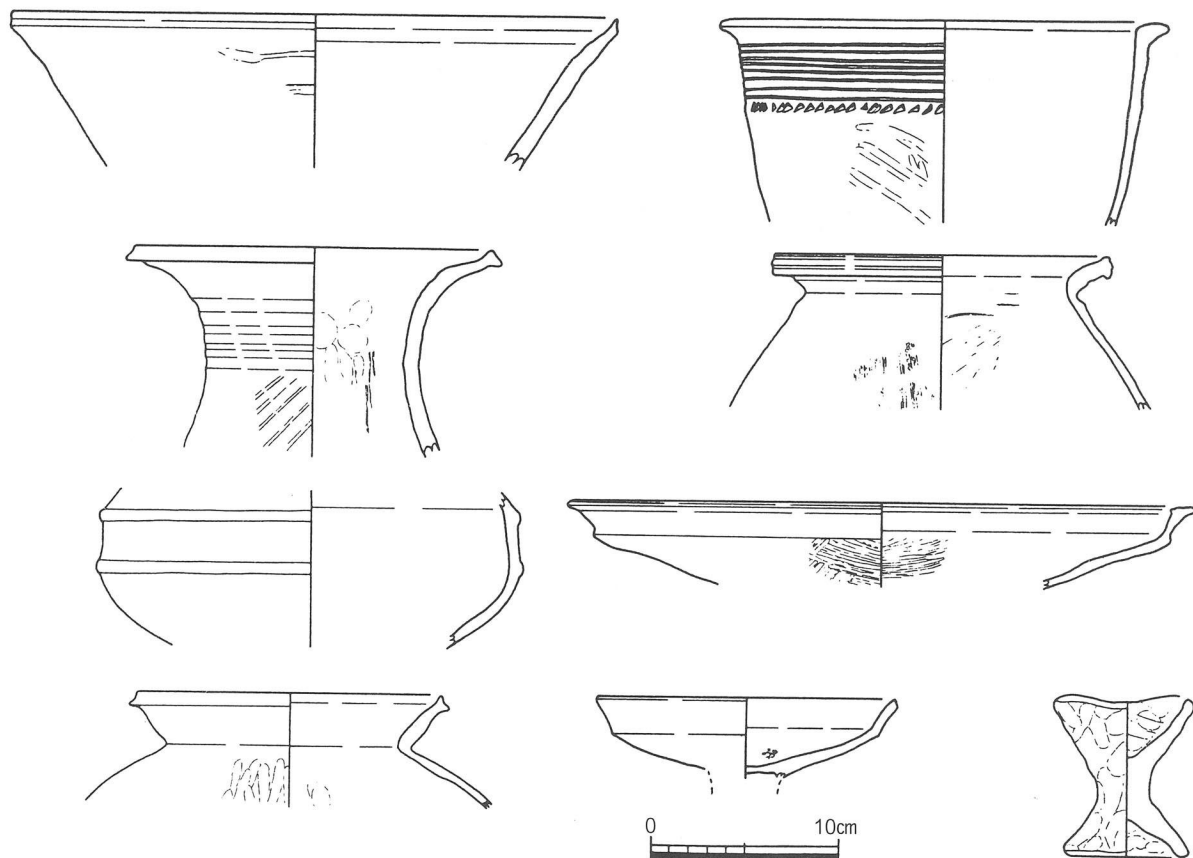
2. 調査成果の概要

調査地は県道高松長尾大内線より北に約800mに位置する。対象面積の5,948㎡のうち昨年度に4,404㎡の調査を実施し、今年度は残り1,544㎡を実施した。対象地を南から北へ向けてⅠ～Ⅷ区に分割したうち、今年度の調査は残りのⅦ・Ⅷ区である。昨年度の調査ではⅢ区の埋積谷をはさんでⅠ・Ⅱ区の微高地では弥生時代後期から中世までの集落が断続的に形成され、Ⅳ～Ⅵ区の微高地では弥生時代中期と平安時代後期の集落が広がることが確認されている。今年度の調査ではⅦ区では北微高地の続きが確認され、Ⅷ区で地形が徐々に北へ向かって落ち、北端では津田川の氾濫原が確認されている。

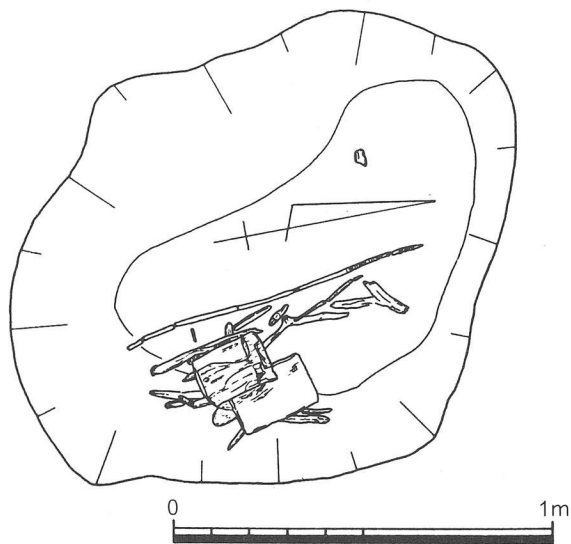
Ⅶ区ではⅥ区の微高地の続きが耕作土直下地山で検出されているが、Ⅵ区で認められた弥生時代中期の遺構の広がり一部確認できたものの、遺構密度は希薄であった。遺構は弥生時代～中世の柱穴を50穴程度、掘立柱建物を2棟検出した。Ⅶ区の北半からは厚さ20cm程度の包含層の堆積がみられⅧ区の中央付近まで広がり、Ⅷ区の南端では13世紀代の遺構に切り込まれる。Ⅷ区の中央付近では縄文時代晩期～弥生時代後期までの土器を含む湿地状の遺構を検出し、その中からは木製品が出土した。Ⅷ区では13世紀代の溝2条の他、北側では弥生時代後期の竪穴住居を検出し、北端では津田川の氾濫原と思われる砂層の堆積が認められた。

(1) 弥生時代の遺構・遺物

S X 01 VIII区中央付近で西北西から東北東へ向けて検出した。古代～中世の遺物包含層を除去したのち、概ね幅4m、長さ9.5m、深さ0.8mの範囲で検出した。埋土は概ね粘性の強い黒灰色粘土である。遺物は時期幅があり、縄文時代晩期～弥生時代後期の土器が含まれる。S X 01の南東隅付近で広鋳が2点、その下部に杓子型木製品が3点、その他柄と思われる木製品が出土した。広鋳1点は幅20.5cm、長さ30cmのほぼ長方形で、厚さは両端で1.5cm、中央で約4cmである。柄孔は上端に穿つ。もう一点は未製



第54図 VIII区 S X 01 出土土器 (1 / 4)



第55図 VIII区 S X 01 木製品出土状況 (1 / 20)

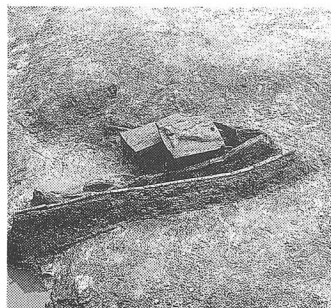


写真 79
VIII区 S X 01
木製品出土状況

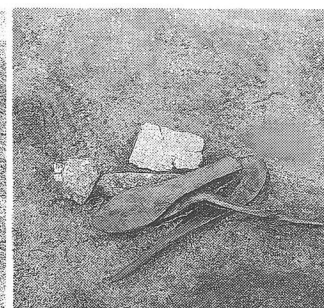


写真 80
VIII区 S X 01
木製品出土状況



写真81 VIII区全景(南より)



写真82 VII区全景(南より)

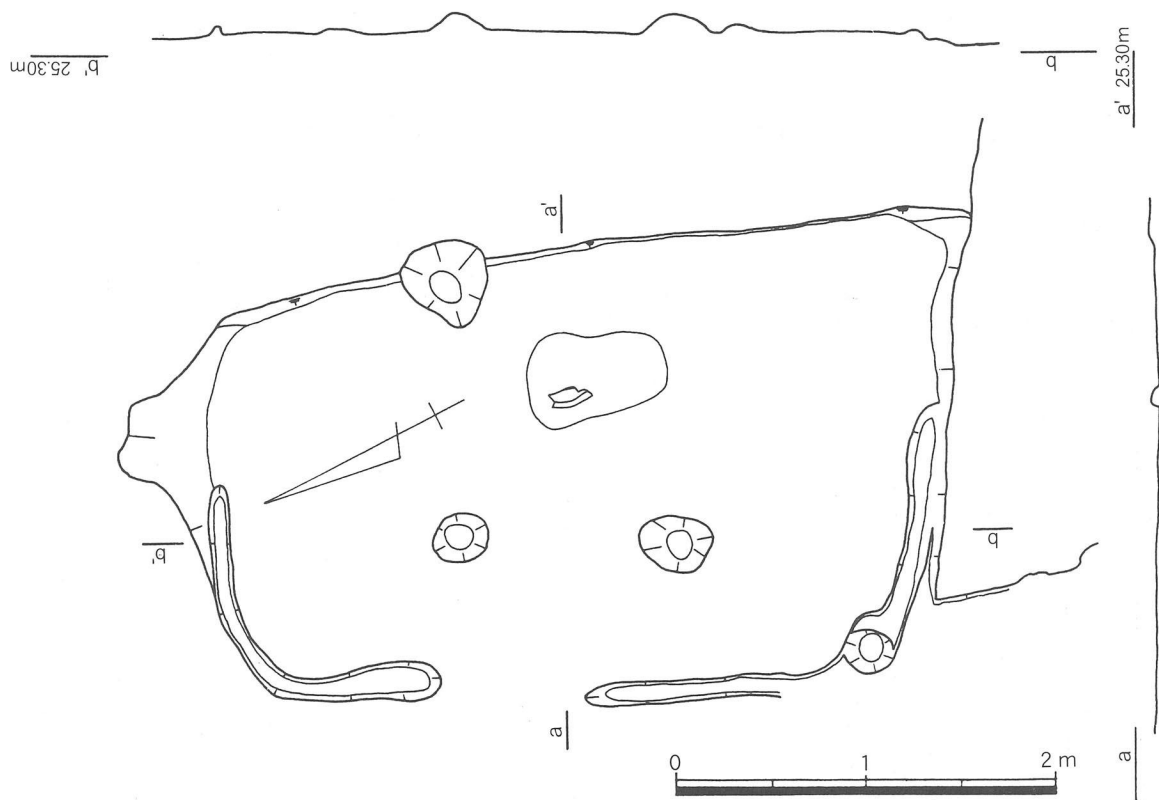


品で、木を板状に、断面はかまぼこ型に加工する。大きさ、厚さは他の1点とほぼ同じである。

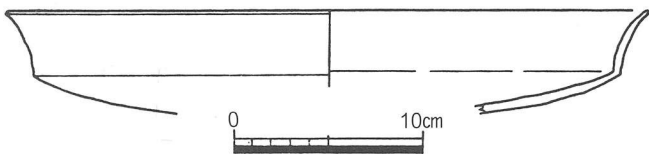
S H01 VIII区北側で検出した隅丸方形の竪穴住居である。南西隅は一部用地外へ延び、東側は後世の攪乱により破壊されていた。一辺約4mで深さは約10cmである。床面上では周囲に幅約10cm、深さ約7cmの壁溝が巡る。柱穴は竪穴住居の上面から切り込まれている、中世の遺物を包含する柱穴を除き、3穴検出した。柱穴はおおむね直径30~40cm、深さ20~30cmで埋土は暗灰色粘質土である。そのうちの1穴からはガラス玉が2点出土した。中央付近では長辺70cm、短辺40cmの楕円形の範囲で焼土が集中する部分があり、高坏が出土した。

この竪穴住居の時期は高坏より弥生時代後期後半と考えられる。

S B02 VII区の南部で検出した掘立柱建物である。西部は用地外へ延びるため全体の規模は不明であ



第57図 VIII区S H01平・断面図(1/40)



第58図 VIII区S H01出土土器(1/4)

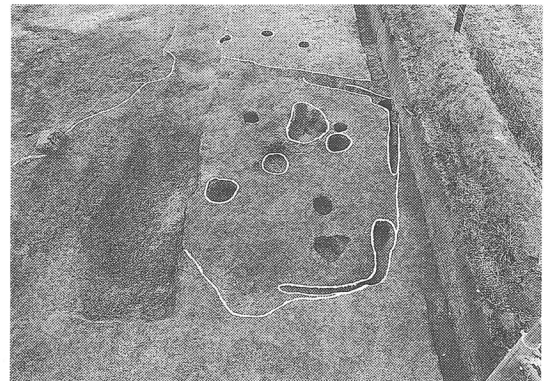


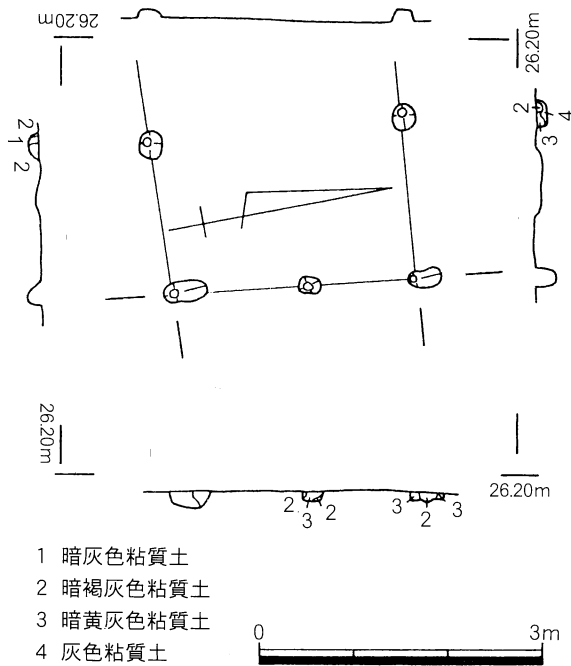
写真83 VIII区S H01完掘状況

る。今回の調査では1間以上×2間を検出した。建物の主軸方向はN-85°-Wである。柱穴はおおむね円形で直径20~25cm, 深さ10~20cm, 埋土は暗褐灰色粘質土である。柱穴のうち1穴から弥生土器甕

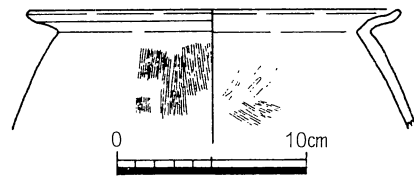
が出土した。掘立柱建物の時期は出土土器から弥生時代中期と考えられ, VI区で検出した弥生時代中期の集落がVII区へも一部広がるようである。

S B 03・S B 04 VIII区中央付近で検出した掘立柱建物である。古代~中世の包含層を除去した後に検出した。ともに2間×3間で, 互いに近接している。柱穴はおおむね円形で S B 03で直径20~25cm, 深さ20~30cm, S B 04で直径30~35cm, 深さ20cmで, 埋土は茶褐色粘質土, 主軸方位は S B 03がN-90°-W, S B 04がN-85°-Wである。S B 04の柱穴のうち一穴には柱材が遺存していた。周囲には包含層の下で検出できる

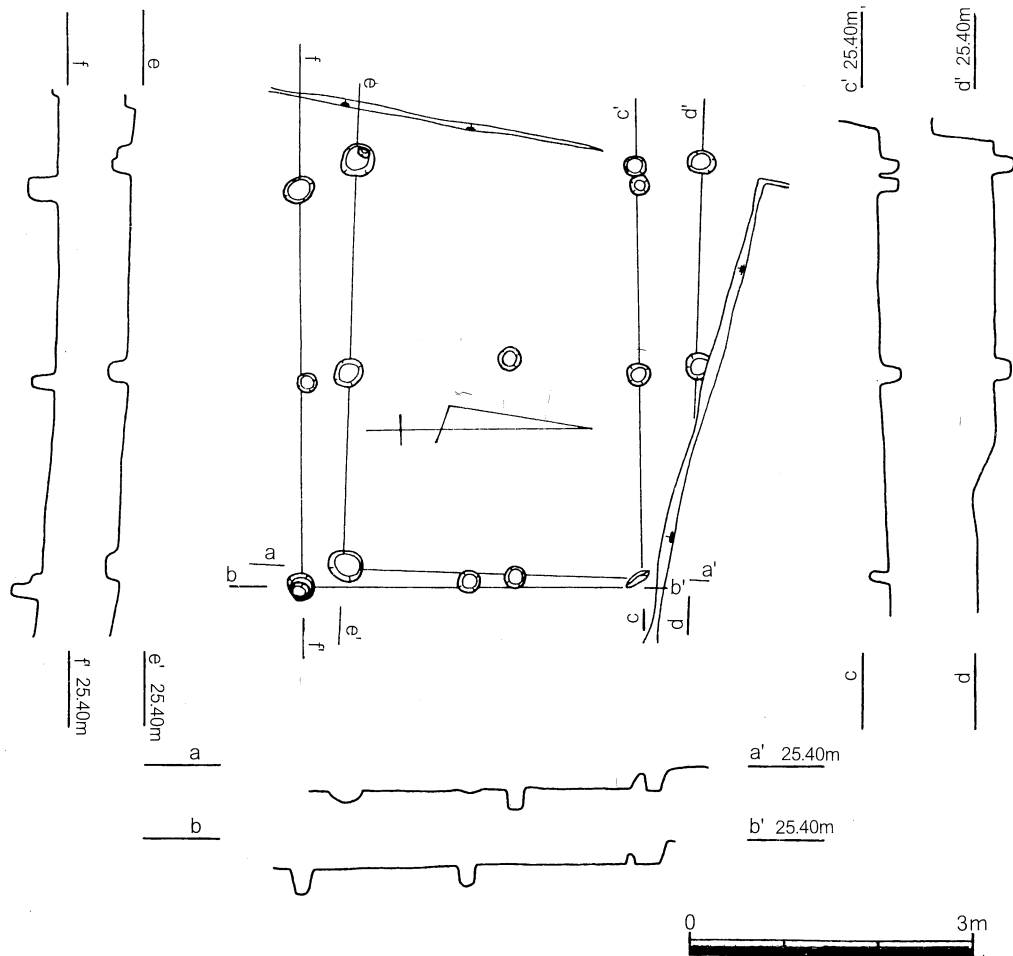
遺構は弥生時代の遺構だけであるので弥生時代の項目に入れたが, 土器を含む柱穴がなく, 古代以前であること以外詳細な時期は不明である。



第59図 VII区 S B 02 平・断面図 (1/80)



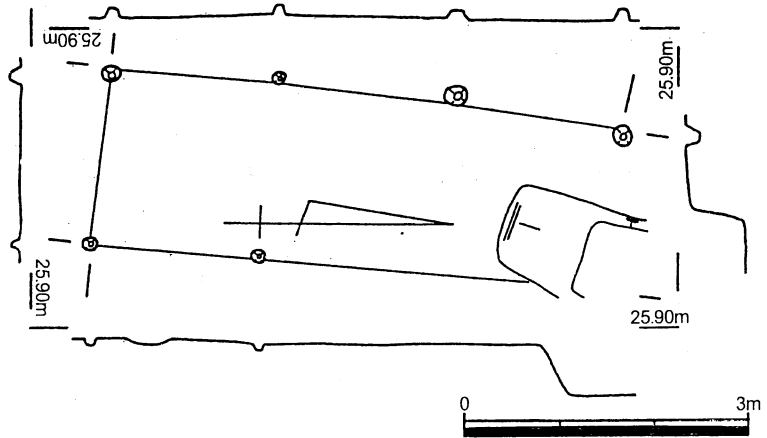
第60図 VII区 S B 02 出土土器 (1/4)



第61図 VIII区 S B 03・04 平・断面図 (1/80)

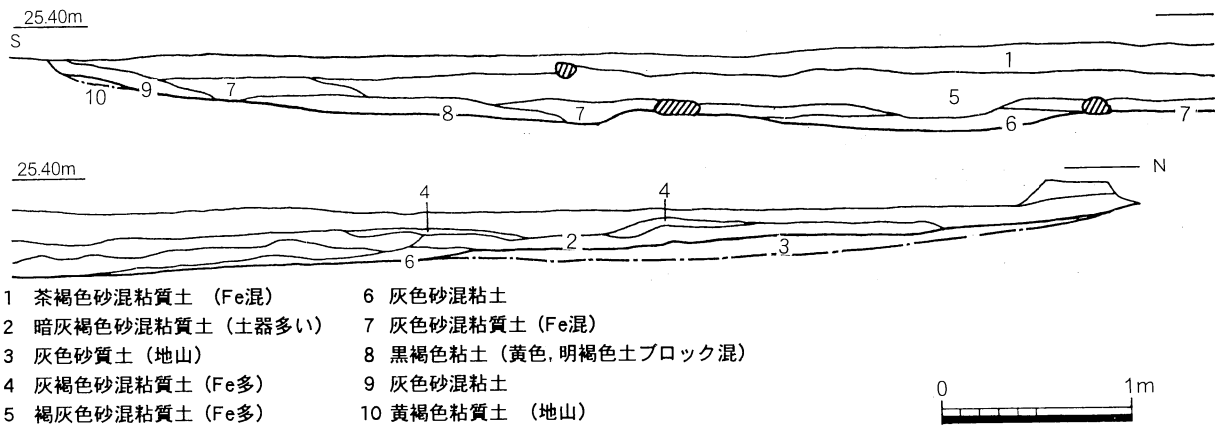
(2)中世の遺構・遺物

S B 01 VII区の北部で検出した小規模な掘立柱建物である。掘立柱建物を検出した北側からVIII区へかけて包含層が広がる。VII区は全般に遺構密度は希薄であるが北側ではさらに希薄になる。1間×3間で主軸方位はN-7°-Eである。柱穴はほぼ円形でおおむね直径13~20cm, 深さ10~12cm, 埋土は褐灰色粘土である。柱穴からの出土遺物はなかったが, VI区



第62図 VII区 S B 01 平・断面図 (1/80)

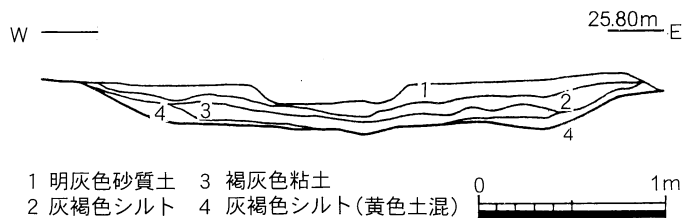
では弥生時代中期の掘立柱建物の集落が広がるものの, 建物規模や埋土より中世のものと考えられる。S D 01 VIII区の北側で検出した東西方向の溝状遺構である。調査区の北西側には津田川が流れており, 周囲の地形も東から西へ下がっているのので, S D 01も東から西へ流れたと考えられる。東側では幅14.5mと広く, 二またに分かれているが, 中央付近で合流し, 西側では幅6.5mとなり調査区外へ延びる。深さはおおむね30~40cmで広く浅い。埋土中からは土師器小皿, 黒色土器椀, 瓦器椀等が出土している。土器は小片で磨滅したものが多くコンテナ6箱分が出土した。時期は出土遺物より12世紀後半~13世紀初頭頃と考えられる。



- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 1 茶褐色砂混粘質土 (Fe混) | 6 灰色砂混粘土 |
| 2 暗灰褐色砂混粘質土 (土器多い) | 7 灰色砂混粘質土 (Fe混) |
| 3 灰色砂質土 (地山) | 8 黒褐色粘土 (黄色, 明褐色土ブロック混) |
| 4 灰褐色砂混粘質土 (Fe多) | 9 灰色砂混粘土 |
| 5 褐灰色砂混粘質土 (Fe多) | 10 黄褐色粘質土 (地山) |

第63図 VIII区 S D 01 断面図 (1/40)

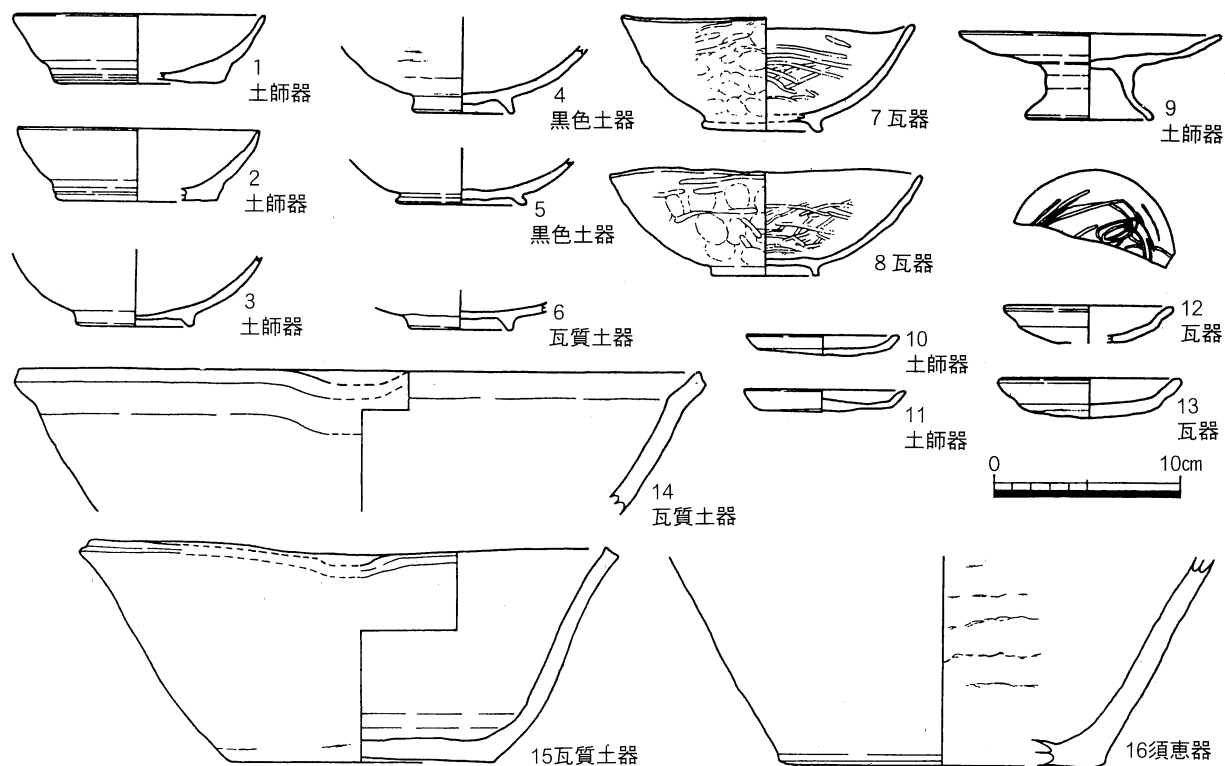
S X 02 VIII区の南端で検出した。古代~中世の遺物包含層の上面で検出した。東西方向に延びる溝状遺構が2条平行して走り, 西端付近で2条の溝が連結する。そのうち南側の溝状遺構については調査



- | | |
|----------|-----------------|
| 1 明灰色砂質土 | 3 褐灰色粘土 |
| 2 灰褐色シルト | 4 灰褐色シルト (黄色土混) |

第64図 VIII区 S X 02 断面図 (1/40)

区外へ延びる。検出した位置は現在の水田と水田の境の畦畔の位置とほぼ同じで, 条里型地割の坪界線のほぼ中間に当たる。規模は幅3~4m, 深さ25~35cmである。埋土中からは土師器小皿, 黒色土器椀,



第65図 VIII区SD01・SX02出土土器(1/4)

SD01 2, 9, 12, 13, 14

SX02 1, 3~8, 10, 11, 15, 16

瓦器椀等コンテナ1箱分の遺物が出土している。溝状遺構に囲まれた部分は精査したものの遺構は認められなかった。時期は出土遺物より12世紀後半~13世紀初頭頃と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では全体的に遺構は希薄であったが、VII区の南端でVI区から広がると考えられる弥生時代中期の掘立柱建物群の続きを検出した。また、VII区からVIII区では中世の遺構の拡がりを確認した。その他、今回弥生時代のSX01から木製品が数点出土した。木製品は昨年度の調査でもIII区SR01、小型仿製鏡が出土した遺構から長方形の板状の木製品が数点出土しており、関連が注目される。

報告書抄録

ふりがな	けんどうかんけいまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう								
書名	県道関係埋蔵文化財発掘調査概報								
副書名									
巻次	平成8年度								
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	西村尋文・森下友子・樋本清輝・北山健一郎・谷畑雅稔・山元素子・宮崎哲治・多田 慎・信里芳紀・松本和彦								
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター								
所在地	〒762 香川県坂出市府中町南谷5001-4					電話0877-48-2191			
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター								
発行年月日	1997年3月31日								
総ページ数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数		
82頁	6頁	76頁	0頁	0頁	83枚	65枚	0枚		
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
			市町	遺跡					
かわつかわにしせいせき 川津川西遺跡	かがわけんさかいでしかわつちょう 香川県坂出市川津町72-2		37203		34度 16分 49秒	133度 51分 31秒	19961001 ～ 19961231	1,500	国道438号線道路 改築事業川津橋橋梁 工事
おんやまこふんぐん 雄山古墳群	かがわけんさかいでしかわつちょう 香川県坂出市高屋町		37203		34度 19分 53秒	133度 53分 59秒	19960401 ～ 19960930	6,328	地方道路整備臨時交 付金県道高松王越坂 出線道路改良工事
はげづかいせき 兀塚遺跡	かがわけんかまつしだんしちょう えんざちょう 香川県高松市檀紙町203-4・円座町342外		37201		34度 17分 24秒	134度 0分 12秒	19960401 ～ 19960930	3,529	県道三木国分寺線地 方特定道路整備事業
たけもとせき 竹元遺跡	かがわけんかまつしひがしうえだちょう 香川県高松市東植田町		37021		34度 14分 20秒	134度 6分 48秒	19970201 ～ 19970331	453	県道塩江屋島西線道 路局部改修工事
みなみあまえだせき 南天枝遺跡	かがわけんきたぐんみきちょうたなかあざみなみあまえだ 香川県木田郡三木町田中宇南天枝1005-1		37341		34度 15分 42秒	134度 7分 30秒	19960401 ～ 19961120	3,800	県道高松長尾大内線 道路改築事業
おぼないせき 尾端遺跡	かがわけんきたぐんみきちょうたなかあざおぼな 香川県木田郡三木町田中宇尾端13-1外		37341		34度 15分 42秒	134度 6分 12秒	19961121 ～ 19970331	4,200	県道高松長尾大内線 地方特定道路整備事 業
はらなかむらいせき 原中村遺跡	かがわけんきたぐんむれちょうはら 香川県木田郡牟礼町原		37342		34度 19分 10秒	134度 8分 50秒	19960401 ～ 19960630	1,500	高松志度線緊急整備 工事
てらだ・さんのみやどおりせき 寺田・産宮通遺跡	かがわけんおおかわぐんおおかわちょうとみたにしあざおおみち 香川県大川郡大川町富田西字大道		37305		34度 15分 54秒	134度 13分 24秒	19960401 ～ 19960630	1,544	県道富田西志度線緊 急地方道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
川津川西遺跡		縄文時代後～晩期			縄文土器				
	集落跡	古墳時代後期 室町時代	竪穴住居 掘立柱建物		須恵器・土師器 須恵器・土師器			地鎮遺構	
雄山古墳群	墓域	古墳時代後期	古墳(円墳)		須恵器・土師器・玉類 青銅鏡・鉄製品・埴輪			7基のうち4基を調査	
兀塚遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居・溝		須恵器・土師器・管玉				
		鎌倉時代	掘立柱建物・土坑		土師器・須恵器・瓦器				
		江戸時代	掘立柱建物・土坑		陶磁器				
竹元遺跡		縄文時代晩期	自然河川・土坑		縄文土器				
	集落跡	弥生時代後期	溝・柱穴		弥生土器				
南天枝遺跡	集落跡	古墳時代終末	掘立柱建物・竪穴住居・溝		須恵器・土師器			建物22棟	
		中世	掘立柱建物・井戸・溝		須恵器・土師器・瓦器・銭			建物11棟	
		近世前半	溝		土師器・陶磁器				
尾端遺跡	集落跡	古墳時代終末	溝		須恵器・土師器				
		奈良時代	掘立柱建物・溝・大型土坑		須恵器・土師器・木樋				
		近世末	墓・井戸・柱列・大型土坑		土師器・陶磁器				
原中村遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居・自然河川		弥生土器・石器				
		江戸時代	柱穴・土坑		陶磁器				
寺田・産宮通遺跡	集落跡	弥生時代	掘立柱建物・竪穴住居		弥生土器・木製品				
		鎌倉時代	落ち込み 溝		土師器・黒色土器・瓦器				

県道関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成8年度

平成9年3月31日

編集 財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 サヌキ印刷株式会社